

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第395集

きた だ
北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

水沢東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

きた だ
北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

水沢東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました水沢東バイパス建設工事を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るために地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、水沢東バイパス建設工事に関して、平成12~13年度に発掘調査を行った岩手県水沢市北田Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって北上川西岸の低位段丘上に、土坑や溝跡のほか、土器や石器などが発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所、水沢市教育委員会、同埋蔵文化財調査センターをはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成14年1月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 村上勝治

例　　言

1. 本報告書は、岩手県水沢市佐倉河字前田中4-3ほかに所在する北田Ⅱ遺跡発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、水沢東バイパス建設工事に伴い、県教育委員会文化課と国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は平成12・13年度に実施したものである。委託者は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所である。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。
遺跡登録台帳番号……NE17-2038
遺　　跡　略　号……KDII-00(平成12年度)、KDII-01(平成13年度)
5. 発掘調査期間と調査面積、野外調査担当者は以下のとおりである。

平成12年度分	調　　査　期　間	平成12年8月11日～平成12年10月16日
	調　　査　面　積	2.408m ²
	調査担当者	工藤　徹・斎藤麻紀子
平成13年度分	調　　査　期　間	平成13年4月9日～平成13年5月7日
	調　　査　面　積	9.00m ²
	調査担当者	菅原靖男・斎藤麻紀子
6. 調査の室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。

平成12年度分	整　理　期　間	平成12年11月1日～平成13年3月31日
	整理担当者	工藤　徹・斎藤麻紀子
平成13年度分	整　理　期　間	平成13年11月1日～平成14年1月31日
	整理担当者	菅原靖男
7. 本報告書の執筆は、平成12年度分を工藤徹・斎藤麻紀子、平成13年度分を菅原靖男が担当し、編集は菅原靖男が行った。
8. 自然科学関連の分析鑑定及び座標原点の測量は次の機関に依頼した。(敬称略)
石　質　鑑　定……花崗岩研究会
座標原点の測量……平成12年度・㈱中央測量設計　平成13年度・㈱南部測量設計
9. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略)
国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所、水沢市教育委員会、水沢市埋蔵文化財調査センター
10. 野外調査にあたっては水沢市と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。
11. 土層の観察は、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1989) によった。
12. 本遺跡から出土した遺物および調査にかかる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

本文目次

序

例言

I・調査に至る経過	3	V・平成12年度遺構外出土遺物	23
1. 遺跡の位置	3	1. 土器	23
2. 遺跡周辺の地形と地質	4	2. 石器	23
3. 基本層序	4	3. 貨幣	24
4. 周辺の遺跡	6		
II・調査の方法と室内整理	11	VI・平成13年度検出された遺構と遺物	44
1. 野外調査の方法	11	1. 溝状遺構	44
2. 室内整理の方法	12	2. 遺物集中区	46
III・平成12年度検出された遺構と遺物	16	3. 出土した遺物	46
1. 土坑	16	Ⅳ・まとめ	55
2. 溝状遺構	16	1. 遺構	55
3. 柱穴状土坑	20	2. 遺物	56
4. 旧河道	20	報告書抄録	67
5. 遺物集中区	20	職員一覧	68

図版目次

第1図 遺跡の位置	1	第4図 周辺の遺跡分布図	7
第2図 遺跡周辺の地形図	2	第5図 遺構配置図・基本土層柱状図	13
第3図 遺跡周辺地形分類図	5		

<平成12年度調査>

第6図 土坑及び柱穴状土坑群	17
第7図 溝状遺構	19
第8図 旧河道	21
第9図 遺構外出土遺物(1)	25
第10図 遺構外出土遺物(2)	26
第11図 遺構外出土遺物(3)	27
第12図 遺構外出土遺物(4)	28

<平成13年度調査>

第13図 溝状遺構	45
第14図 遺構内外出土遺物(1)	48
第15図 遺構外出土遺物(2)	49
第16図 遺構外出土遺物(3)	50
第17図 遺構外出土遺物(4)	51
第18図 遺構外出土遺物	52

写 真 図 版 目 次

〈平成12年度調査〉

写真図版1	遺跡遠景・1区全景	33
写真図版2	2区全景・1区基本土層	34
写真図版3	2区基本土層・1・2号土坑	35
写真図版4	1・2号溝跡	36
写真図版5	3号溝跡・2区旧河道	37
写真図版6	柱穴状土坑群	38
写真図版7	遺構外出土遺物(1)	39
写真図版8	遺構外出土遺物(2)	40
写真図版9	遺構内・外出土土器	41

〈平成13年度調査〉

写真図版10	3区調査前風景・全景	59
写真図版11	3区基本土層・4号溝跡	60
写真図版12	5号溝跡・遺物出土状況	61
写真図版13	6号溝跡・作業風景	62
写真図版14	遺構内外出土遺物(1)	63
写真図版15	遺構外出土遺物(2)	64
写真図版16	遺構外出土遺物(3)	65
写真図版17	遺構外出土遺物	66

表 目 次

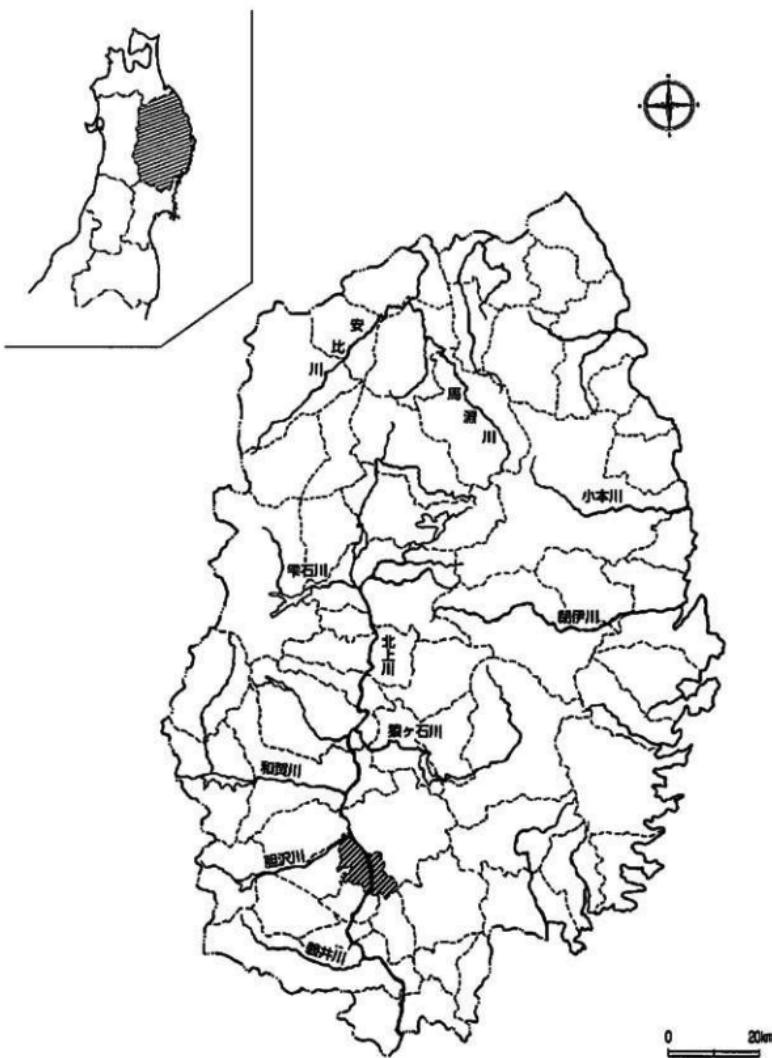
第1表	周辺の遺跡一覧(1)	8
第2表	周辺の遺跡一覧(2)	9
第3表	周辺の遺跡一覧(3)	10

〈平成12年度調査〉

第4表	柱穴状土坑一覧表	22
第5表	土器観察表	29
第6表	石器観察表	30
第7表	貨幣観察表	30

〈平成13年度調査〉

第8表	石器観察表	52
第9表	遺物観察表(1)	53
第10表	遺物観察表(2)	54
第11表	陶器観察表	54
第12表	木製品観察表	54
第13表	金属製品観察表	54



第1図 週跡の位置



第2図 遺跡周辺の地形図

I. 調査に至る経過

一般国道4号は、東京を起点として、福島県、宮城県、岩手県を経て青森県に至る東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

水沢東バイパスは、起点水沢市真城と終点水沢市佐倉河との間約9.6kmの区間で計画されており、水沢市の国道4号の交通混雑解消と交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に、高速交通時代の一端を担い地域経済発展の根幹となる道路として、昭和60年度より事業を進めて来た。現在迄に、終点側より延長2.5kmについて暫定2車線の供用を行っている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度分布調査を実施し、今回発掘調査を実施した北田II遺跡ほか20余有余の遺跡が確認され、その結果に基づいて、岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成12年度埋蔵文化財調査事業について、平成12年1月24日付け「教文第1074号」により、財團法人岩手県文化振興事業団へ通知し、それを受けて当埋蔵文化財センターは、平成12年8月11日付けの委託契約に基づいて平成12年8月11日から北田II遺跡の発掘調査に着手した。当初面積は2,408m²で終了面積は同じく2,408m²である。

又、同じく平成13年度埋蔵文化財調査事業について岩手県教育委員会より財團法人岩手県文化振興事業団が通知を受け、それを受けて当埋蔵文化財センターは平成13年4月2日付けの委託契約に基づいて平成13年4月9日から同じく北田II遺跡の発掘調査に着手した。当初面積は2,000m²であったが委託者の都合により、終了面積は900m²である。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

北田II遺跡は、岩手県南部の水沢市に所在し、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の東北東約1.5kmに位置し、胆沢崩状地を東流する網状河川に侵食された沖積地に立地する。標高は約38mで、遺跡の東方約600m地点を北上川が南流する。遺跡の現況は水田である。

本遺跡は国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」(N-54-14-14)の図幅に含まれ、その地点は北緯39度8分27秒、東經141度9分57秒である。

遺跡の所在する水沢市は、岩手県南部の北上山地と奥羽山脈に挟まれた低地帯に位置し、県庁所在地盛岡市までは約65kmの距離にある。北は金ヶ崎町、南は前沢町、西は胆沢町、東は江刺市と境を接しており、その面積は約96km²である。南北に東北新幹線、東北本線の鉄道網と東北縦貫自動車道、国道4号線が走り、東西には国道343号と国道397号線が走り、胆江地区の中心的役割を果たしている。また、県南の穀倉地帯としても有名である。

2. 遺跡周辺の地形と地質

水沢市は、岩手県南部の北上川中流域沿岸に位置し、南流する北上川を挟んで、東側の北上山地に連なる丘陵地と西側の胆沢扇状地から成り立っている。胆沢扇状地は、奥羽山脈の隆起と胆沢川の堆積、侵食によって形成された開析扇状地であり、県内最大、北上川流域最大ともいわれる広大な面積を有している。

胆沢扇状地はその上に形成された段丘群によって、南から北に向かって段々と低下する様相を呈している。これらの段丘群は高位のものから一曾坂段丘、胆沢段丘、水沢段丘に大別され、水沢市はその大部分が胆沢、水沢段丘に属している。このうち胆沢段丘は上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、下位の水沢段丘は上位面と下位面に二分される形を取っている。

本遺跡は、この水沢低位段丘の縁辺部、北上川から西に約600mの地点に位置している。周囲には平坦な水田地帯が広がっており、付近一帯は大部分が北上川の冲積地であることから、水の影響を受け易い排水不良の土地柄である。調査区は元は水田として利用されており、水の溜まりやすい土地である。

付近の土壤は一般に粘土質土で構成されているが、礫層・礫質土壤の分布も多く見られる。また段丘寄りの地域ではグライ土壤、黒泥質土壤も多く分布している。

《参考・引用文献》

水沢市教育委員会（1984）：水沢の自然と文化Ⅰ 水沢市文化財調査研究年報

000水沢市埋蔵文化財調査センター（1996）：「杉の堂遺跡」 水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集

000水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：「杉の堂遺跡群」 水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

000水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：「鹿野遺跡」 水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集

3. 基本層序

調査区内では以下のような層序が観察された。平成12年度調査区は道路を挟んで2ヶ所に分れるため、北西部（1区）と南東部（2区）の2地点で土層断面を記録し、平成13年度調査区を3区とした。

<1区・2区>

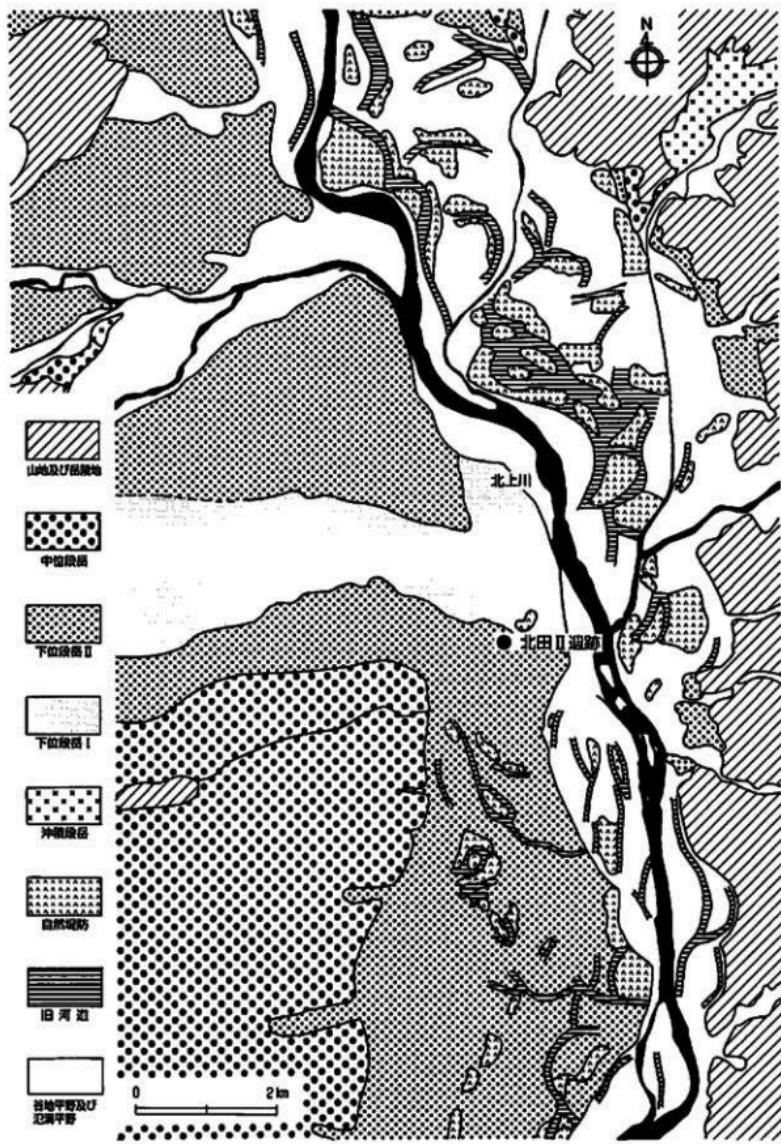
第I層 7.5YR 3/3 暗褐色粘土質土 粘性が強く、しまりも密である。現表土で、遺跡全面を覆っている

第II層 7.5YR 3/1 黒褐色粘土質土 粘性が強く、しまりも密である。10YR 4/4 暗褐色粘土質土 斑状に混入している。绳文晩期～弥生時代の遺物包含層である。

第III層 10YR 4/4 暗褐色粘土質土 粘性が強く、しまりも密である。2区では確認されない層である。

第IV層 7.5YR 4/2 灰褐色粘土質土 粘性が強く、しまりも密である。5YR 3/6 暗赤褐色の酸化鉄が見られる。1区では確認されない層である。

第V層 7.5YR 4/1 灰褐色粘土質土 粘性が強く、しまりはやや弱くなる。1区では確認されない層である。



第3図 道跡周辺地形分類図

第VI層 砂疊層 (150mm以上)

<3区>

- | | | | | | |
|-----|------------|------|-----|------|-----------------------|
| 第Ⅰ層 | 10YR 2/3 | 黒褐色土 | 粘性強 | しまり密 | 耕作土。 |
| 第Ⅱ層 | 10YR 1.7/1 | 黒色土 | 粘性強 | しまり密 | 縄文時代晚期～弥生時代の遺物包含層である。 |
| 第Ⅲ層 | 10YR 3/3 | 暗褐色土 | 粘性強 | しまり密 | Ⅱ層から縦状に酸化鉄が混入する。 |

4. 周囲の遺跡

本遺跡のある水沢市には、平安時代を中心多くのが存在する。それらの多くは沖積低地を中心として、これと接する段丘面や丘陵地に分布しており、分布と地形の関係には各時代の特徴が現れているとされる。

馳上遺跡、鶴ノ木住吉遺跡など縄文時代早期～中期の遺跡は、胆沢段丘面や北上川東岸の丘陵地を中心とする地域に多く分布しているが、杉の堂遺跡や里塙遺跡に代表される縄文時代後・晩期になると生活面の低下に伴って水沢段丘面へと移り、さらに弥生時代には水川として利用可能な沖積地へと広がっていく。続く古墳時代～奈良時代では低地への進出が一時的に衰退したものと思われ、遺跡の位置は低位段丘面や沖積地周辺の自然堤防上などに限定されるが、平安時代に入ると生活圏が拡大したことにより、段丘面の内部や北上川東岸の沖積平野にも多くの遺跡が見られるようになる。

周辺の代表的な遺跡としては、本遺跡の南西に位置する角坂古墳や、北西約4.5kmに位置する胆沢城といった国指定史跡を挙げることができる。角坂古墳は5世紀後半に造られた本州最北の前方後円墳である。胆沢城は中央政権による東北支配の拠点として、平安時代初期に造営されたものであり、周辺の村落跡とともに、当時の東北地方の様子を知る資料として調査が続けられている。

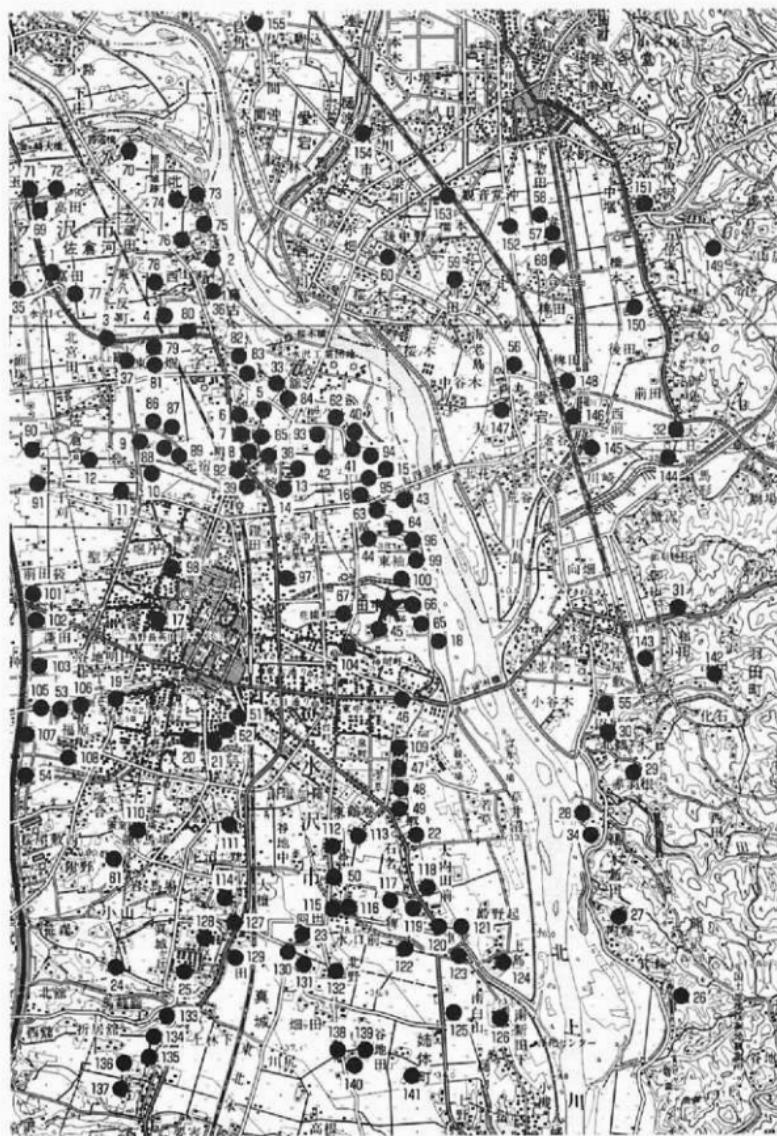
本遺跡の西約1kmには、県内で確認された最初の弥生時代の遺跡である常磐広町遺跡が位置しており、水田跡や櫛痕のある土器片が出土している。この遺跡は、従来は存在しないとされていた岩手の弥生時代の存在を実証したもので、岩手のみならず東北地方の弥生文化研究にも重要な意味を持つ遺跡である。また本遺跡の南約1.2kmには、縄文時代晚期・平安時代の大規模な複合遺跡として、早くから知られていた杉の堂遺跡が位置しており、現在もその調査が続いている。

この他、本遺跡のごく近辺にも縄文・平安時代の複合遺跡である野田遺跡、弥生・奈良・平安時代の複合遺跡である同名の北田Ⅱ遺跡、弥生・平安時代の複合遺跡である北田Ⅲ遺跡等が見つかっている。これらの遺跡は、本遺跡の詳細を解明するための有用な資料となるものと思われる。

水沢市内では、今後多くの遺跡の発掘が予定されており、調査の成果が待たれるところである。

（参考・引用文献）

- 岩手県埋蔵文化財センター（1988）：「岩手の遺跡」
朝岩手県文化振興事業団（1996）：「沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報告書第230集
朝岩手県文化振興事業団（1996）：「龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書」 岩埋文報告書第243集



第4図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧(1)

No	遺跡名	時代	種別	遺物・遺構
1	富田(B)	縄文	散布地	縄文土器・石器
2	八幡市	縄文	集落跡	縄文土器(後期)・石甃・石塼・小型石斧等
3	大曾根	縄文	散布地	縄文土器・石器
4	杉木I	縄文	散布地	縄文土器(晩期)等
5	根岸	縄文	散布地	縄文土器(晩期)・石斧・石刀・石鎌等
6	天井ノ町	縄文	散布地	縄文土器
7	瓦ヶ田	縄文	散布地	縄文土器(晩期)
8	車堂	縄文	散布地	縄文土器
9	東船	縄文	散布地	縄文土器
10	中城	縄文	散布地	縄文土器
11	里鎌	縄文	集落跡	縄文土器(晩期)・土偶等
12	幡下	縄文	散布地	縄文土器(中期)
13	道下東	縄文	散布地	縄文土器・石器
14	崎館東	縄文	散布地	縄文土器
15	蟹沢II	縄文	散布地	フレーク
16	矢巾II	縄文	散布地	フレーク
17	新小路	縄文	散布地	縄文土器(晩期)等
18	路呂井御藏場	縄文	集落跡	縄文土器(後期)等
19	駒上	縄文	散布地	縄文土器(早期)
20	駒形神社公園	縄文	散布地	縄文土器(中期)等
21	東上野	縄文	散布地	縄文土器(中期)等
22	石名板	縄文	集落跡	縄文土器・石塼
23	立川内	縄文	集落跡	縄文土器
24	南越森	縄文	散布地	縄文土器(前期)・石塼・石甃等
25	黒田助	縄文	散布地	縄文土器・石塼
26	飯音堂II	縄文	散布地	縄文土器・石器
27	大沢	縄文	散布地	縄文土器(前・晩期)
28	菊ノ木住吉	縄文	散布地	縄文土器(中・後・晩期)・柱穴状ピット等
29	北薗ノ木東	縄文	散布地	縄文土器・石器
30	北薗ノ木西	縄文	散布地	石塼・打製石器
31	羽黒堂	縄文	散布地	石塼
32	師免	縄文	散布地	縄文土器
33	下河原館	縄文	散布地	縄文土器(晩期)
34	綱ノ木南台地	縄文・弥生	散布地	縄文土器・アメリカ式石塼・すり切り石斧
35	富田(A)	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器等
36	藤古	縄文・平安	集落跡	須恵器
37	東人畠I	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器
38	佐野原	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
39	崎館西	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
40	沢田	縄文・平安	散布地	土師器・フレーク
41	東鐵治屋	縄文・平安	散布地	土師器・石器
42	高谷	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
43	杉ヶ崎	縄文・平安	散布地	土師器・フレーク
44	横枕	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
45	野田	縄文・平安	散布地	土師器・石塼
46	杉の堂	縄文・平安	散布地	縄文土器(後・晩期)・大洞・竪・深鉢注口
47	大学工	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
48	大学日	縄文・平安	散布地	土師器・フレーク
49	堀ノ内II	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器
50	林前南館	縄文・平安	城館跡	土師器・石器
51	梨畑	縄文・平安	散布地	縄文土器(中期)等
52	小山崎	縄文・平安	散布地	縄文土器(中期)等
53	北田	縄文・平安	集落跡	縄文土器・土師器等

第2表 周辺の遺跡一覧（2）

No	遺跡名	時代	種別	遺物・遺構
54	袖谷地Ⅳ	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器・フレーク等
55	四明田中	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
56	力石Ⅲ	縄文・弥生・古代	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器
57	寺田Ⅱ	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器
58	下惣田	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
59	三百刈田	縄文・古代	集落跡	縄文土器・土師器・須恵器
60	後中野	縄文・古代	集落跡	縄文土器・土師器・須恵器
61	附野森	縄文・中世	散布地	縄文土器・陶磁器
62	仙人東	弥生・平安	集落跡	土師器・須恵器等
63	惣前町	弥生・平安	散布地	土師器
64	中前田	弥生・平安	集落跡	弥生土器・土師器等
65	北田昌	弥生・奈良・平安	集落跡	弥生土器・内周土師器等
66	北田日	弥生・奈良・平安	散布地	土師器・鐵滓
67	常陸広町	弥生・奈良・平安	散布地	弥生土器・アメリカ式石罐・管玉等
68	寺田	弥生・古代	散布地	弥生土器・土師器・須恵器
69	勝性	古墳～平安	集落跡	土師器・須恵器等
70	ハッコ	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
71	玉貢	奈良	集落跡	土師器・須恵器
72	玉貢前	奈良	集落跡	土師器・須恵器
73	北館	奈良・平安	散布地	土師器・須恵器
74	肥沢城	平	安	城壁跡 土師器・須恵器・郭（国指定道路）
75	祇園	平	安	集落跡 土師器・須恵器
76	椎現堂	奈良	集落跡	土師器
77	獅子鼻	平	安	散布地 土師器・須恵器
78	伯済寺	平	安	集落跡 土師器・須恵器
79	東大畠Ⅱ	平	安	散布地 須恵器
80	龜京	平	安	散布地 調社土師器
81	東大畠	平	安	散布地 土師器・須恵器等
82	吹張Ⅰ	平	安	散布地 土師器
83	吹張Ⅱ	平	安	散布地 土師器
84	東館Ⅲ	平	安	散布地 土師器
85	仙人西	平	安	集落跡 土師器・須恵器
86	西光田Ⅰ	平	安	集落跡 土師器・須恵器
87	道本	平	安	散布地 土師器・須恵器
88	久田	平	安	散布地 土師器・須恵器
89	南久田	平	安	散布地 土師器・須恵器
90	西館	平	安	散布地 土師器
91	福荷山	平	安	散布地 土師器
92	下河原益石	平	安	散布地 土師器
93	南桜沢	平	安	散布地 土師器・須恵器
94	蟹沢	平	安	集落跡 須恵器
95	矢中	平	安	散布地 土師器・須恵器
96	東袖ノ目	平	安	集落跡 土師器
97	石橋	平	安	集落跡 土師器・須恵器
98	女子高校跡地	平	安	散布地 土師器・須恵器
99	久根美	奈良	散布地	非口クロ土師器等
100	北田Ⅰ	平	安	集落跡 須恵器
101	水山	平	安	散布地 土師器
102	後田	平	安	集落跡 土師器・須恵器
103	一本杉	平	安	散布地 土師器
104	蛇塚	不	明	塚 路 メノウ勾玉
105	南尖中Ⅱ	平	安	集落跡 土師器・須恵器
106	高屋敷	平	安	集落跡 土師器・須恵器

第3表 周辺の遺跡一覧（3）

No	遺跡名	時代	種別	遺物・遺構
107	西田Ⅲ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
108	福原	平 安	集落跡	土師器・須恵器
109	沼尻	平 安	散布地	土師器
110	龍ヶ馬場	平 安	集落跡	土師器・須恵器
111	須江	平 安	集落跡	土師器・須恵器
112	林庭Ⅰ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
113	北余目	平 安	散布地	土師器
114	上野	平 安	散布地	土師器・須恵器
115	向田	平 安	散布地	須恵器
116	林前Ⅱ	平 安	散布地	土師器・須恵器
117	木ノ口	平 安	散布地	須恵器
118	大内田前	平 安	散布地	土師器・須恵器
119	小木ノ口	平 安	散布地	土師器・須恵器
120	姉帝東室Ⅱ	平 安	散布地	土師器・須恵器
121	姉帝東室Ⅲ	平 安	散布地	土師器・須恵器
122	水ノ口前東	平 安	散布地	土師器
123	元天神前Ⅱ	平 安	散布地	土師器・須恵器
124	北白山	平 安	散布地	土師器・須恵器
125	根無	平 安	散布地	土師器・須恵器
126	目細	平 安	散布地	環濠・須恵器 等
127	大坂	平 安	集落跡	土師器・須恵器
128	雷神Ⅰ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
129	高田	平 安	集落跡	土師器・須恵器
130	金田Ⅰ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
131	北野Ⅲ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
132	北野Ⅱ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
133	中林A	平 安	集落跡	土師器・須恵器
134	中林B	平 安	集落跡	土師器・須恵器
135	中林里	平 安	散布地	土師器・須恵器
136	堤ヶ沢Ⅱ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
137	堤ヶ沢Ⅰ	平 安	集落跡	土師器・須恵器
138	寺ヶ前Ⅰ	平 安	散布地	土師器
139	寺ヶ前Ⅲ	平 安	散布地	土師器・須恵器
140	寺ヶ前Ⅰ	平 安	散布地	土師器
141	島田Ⅰ	平 安	散布地	土師器・須恵器
142	外浦洗田	平 安	窯 路	須恵器
143	窪田	平 安	散布地	
144	松川	古 代	散布地	土師器・須恵器
145	前広田	古 代	散布地	土師器
146	中屋敷	古 代	散布地	土師器
147	大畠	古 代	散布地	土師器・須恵器
148	鴻ノ巣館	(平安) - 古代	城跡・ 集落跡	土師器・須恵器 住居跡・堀
149	五位塚古墳群		古 墳	塚
150	後田Ⅰ	古 代	散布地	土師器
151	豊田城	古 代	城館跡	土師器・須恵器
152	朴ノ木	古 代	散布地	土師器
153	宮地	古 代	集落跡	土師器・須恵器
154	新川Ⅱ	古 代	散布地	土師器
155	沼の上Ⅱ	古 代	散布地	土師器
★	北田Ⅱ(本遺跡)	縄文晚期～弥生	散布地	縄文土器(晚期)・弥生土器・石器

- (1) 岩手県文化振興事業団 (1998) : 「北野古道跡発掘調査報告書」 岩手文報告書第272集
 (2) 水沢市埋蔵文化財調査センター (1999) : 「杉の堂遺跡」 水沢市埋蔵文化財調査センター報告書第13集
 (3) 水沢市埋蔵文化財調査センター (2000) : 「下横田遺跡1」 水沢市埋蔵文化財調査センター報告書第14集
 (4) 岩手県文化振興事業団 (2000) : 「慈前町遺跡発掘調査報告書」 岩手文報告書第314集

III. 調査の方法と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

平成12年度調査区は、1区（北側）・2区（南側）の二ヶ所に分けられており、このうち1区に国家座標第X系に合わせ基準点1・基準点2を設定し、同様にして2区にも4ヶ所の補点を設置した。また、平成13年度調査区を3区とし、3ヶ所の補点を設置した。大グリッドはこれらの点を通るような形で、西から東に50m間隔でA・B・Cとアルファベットの大文字を、北から南にI・II・IIIと昇順するローマ数字を当てて区画した。小グリッドは大グリッドを5×5mの間隔で細分し、東西にa～jのアルファベットの小文字を、南北に1～10の算用数字を当てて小グリッドとした。グリッドの起点を北西に置き、調査区の名称は大グリッドと小グリッドの組み合わせでIA1a、IB2bというように呼称している。基準点、補点の国家座標第X系の座標値は以下の通りである。

基準点1	X = -95305.000	Y = 28750.000	H = 38.144 m
基準点2	X = -95325.000	Y = 28750.000	H = 38.166 m
補 点 1	X = -95340.000	Y = 28830.000	H = 37.534 m
補 点 2	X = -95370.000	Y = 28830.000	H = 37.484 m
補 点 3	X = -95355.000	Y = 28815.000	H = 37.677 m
補 点 4	X = -95355.000	Y = 28845.000	H = 37.426 m
補 点 5	X = -95305.000	Y = 28815.000	H = 37.691 m
補 点 6	X = -95285.000	Y = 28815.000	H = 37.690 m
補 点 7	X = -95285.000	Y = 28800.000	H = 37.867 m

(2) 稽掘・遺構検出

調査は各調査区とも雑物の除去後に、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体に入手による数本のトレンチを設定した。その結果、I層（表土）からは遺物・遺構が確認されなかつたため重機でI層を除去した。その後、人力によってII層以下を掘り下げた。遺構の検出はII層以下で行った。なお、旧河道の確認のため調査終了直前に重機で深掘りトレンチを4本設定した。

(3) 遺構の命名

検出された遺構には、第1号土坑、第2号溝状遺構などと検出順に遺構名を付している。また、平成13年度調査で検出された遺構は平成12年度からの続番号で遺構名を付した。

(4) 遺構の精査と実測

遺構の精査は基本的に2分法を用いて行い、土層を観察しながら進めた。記録として必要な図面の作成は、精査の各段階において行っている。遺構の実測は、簡易造り方測量で行った。平面図は、グリッド区各線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全体に張り、それを測量基準点として実測した。断面図は水平水糸を張り、実測基線とした。実測図の縮尺は20分の1を原則とし、必要に応じて40分の1で作成した。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(5) 遺物の取り上げ

遺物の取り上げにあたっては、遺構内では埋土上位、中位、下位で取り上げ、遺構外遺物については小グリッドと基本層序で取り上げた。

(6) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、35mm判2台（モノクローム・カラーリバーサル1台ずつ）と6×7cm判モノクローム1台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を中心に撮影した。6×7cm判モノクロームについては撮影を省略したものもある。他にボラロイドカメラ1台をメモ的に使用している。

2. 室内整理の方法

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真的整理は、原則として野外調査と平行して行った。

(1) 遺物の処理

遺物は、洗浄後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外に分けて登録し、注記・接合・復元の順に進めた。その後、写真撮影・実測・トレース・図版作成と作業を進めた。

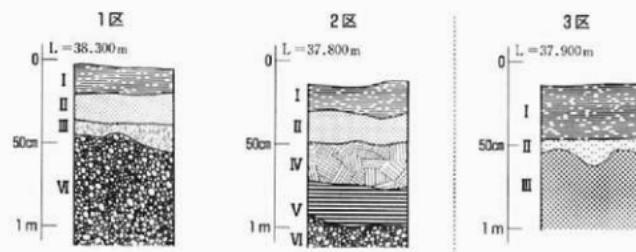
(2) 遺構図面

遺構図面は、点検後に第二原図を作成しその後トレース・遺構図版組の順に進めた。

(3) 図版について

遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。遺構の縮尺は60分の1を基本としたが、一部には例外もあり、その際にはそれにスケールを付している。また、方位は座標北を示している。

遺物図版は、本報告書の分類基準によってまとめて掲載した。縮尺は土器実測は2分の1を基本とするが中には、3分の1、4分の1のものもある。剝片石器は2分の1、礫石器は3分の1を基本とする。古錢は2分の1としている。各図版内にはそれぞれスケールを付している。遺物番号は整理の都合上各調査年度ごとに付している。また、遺物写真的番号は遺物図版番号と一致している。



1区・2区基本土層断面(平成12年度分)

- I. 7.5Y R/3 暗褐色粘土質土 粘性・強 しまり・密 酸化鉄含む (表土)
- II. 7.5Y R/1 黒褐色粘土質土 粘性・強 しまり・密
- 10 Y R4/4 黑褐色粘土質土 層状に混入
- 10 Y R4/4 黑褐色粘土質土 粘性・強 しまり・密 2区には見えない層である
- V. 7.5Y R4/2 黑褐色粘土質土 粘性・強 しまり・密
- 5 Y R3/6 暗赤褐色 酸化鉄入る
- V. 7.5Y R4/1 黑褐色 粘性・強 しまり・やや密 1区には見えない層である
- VI. 砂質層

3区基本土層序(平成13年度分)

- I. 105 Y R2/3 暗褐色土 粘性・あり しまり・密 (表土)
- II. 10 Y R1.7/1 黑色砂質土 粘性・ややあり しまり・密 (縦状に酸化鉄が侵入する)
- III. 10 Y R3/3 暗褐色砂質土 粘性・あり しまり・密 (縦状に酸化鉄が侵入し、砂質感が強まる)

第5図 遺構配図・基本土層柱状図

平成12年度調査

IV. 検出された遺構と遺物

1. 土坑

調査区北側から土坑2基が検出された。検出面はⅡ層で、平面形は円形を基調とする。出土遺物はなく、土坑の用途・性格についての詳細は不明であるが、周囲の出土遺物の特徴や層位から判断し、時期は縄文時代晩期以降のものと推定される。規模、形状等については以下にまとめた。

第1号土坑

〈位置〉 調査区北側南端の平坦面、ⅡA1e区及びⅡA2e区に位置する。周囲には柱穴状土坑群があり、隣接して第2号溝状遺構が南北に走る。

〈検出状況〉 Ⅱ層上面で、不整円形の黒褐色粘土質土の広がりが確認された。上部は水田耕作等により削平されている可能性がある。

〈形状〉 平面形は不整な円形、断面形は浅鉢状を呈する。

〈規模〉 開口部径約134cm×120cm、底部径約115cm×100cm、深さ約24cmを測る。

〈埋土〉 2層に細分される。1層は黒褐色粘土質土を主体とし、褐色粘土質土を含む層であり、2層は褐色粘土質土を主体とし、暗褐色土を含む。いずれにも酸化鉄が糸状に混入している。

〈底面〉 径30~100mmの礫を含む層である。旧河道の影響を受けているものと思われる。

〈壁〉 やや直立気味に立ち上がる。

〈出土遺物〉 埋土中から加工痕のある不定形石器が1点出土している。

〈時期〉 出土遺物がなく詳細は不明であるが、周囲の出土遺物の特徴や検出面等から判断し、縄文時代晩期以降のものと推定される。

第2号土坑

〈位置〉 調査区北側南部の平坦面、ⅠA10g区に位置する。

〈検出状況〉 Ⅱ層上面で、不整円形の黒褐色粘土質土の広がりを確認した。

〈形状〉 平面形は不整な円形、断面形は浅鉢状を呈する。

〈規模〉 開口部径約82cm×72cm、深さ約31cmを測る。

〈埋土〉 2層に細分される。1層は黒褐色粘土質土、2層は暗褐色粘土質土を主体として、下部にやや砂質土が混じる。1、2層とも酸化鉄を含む。

〈底面〉 硬く締まる。

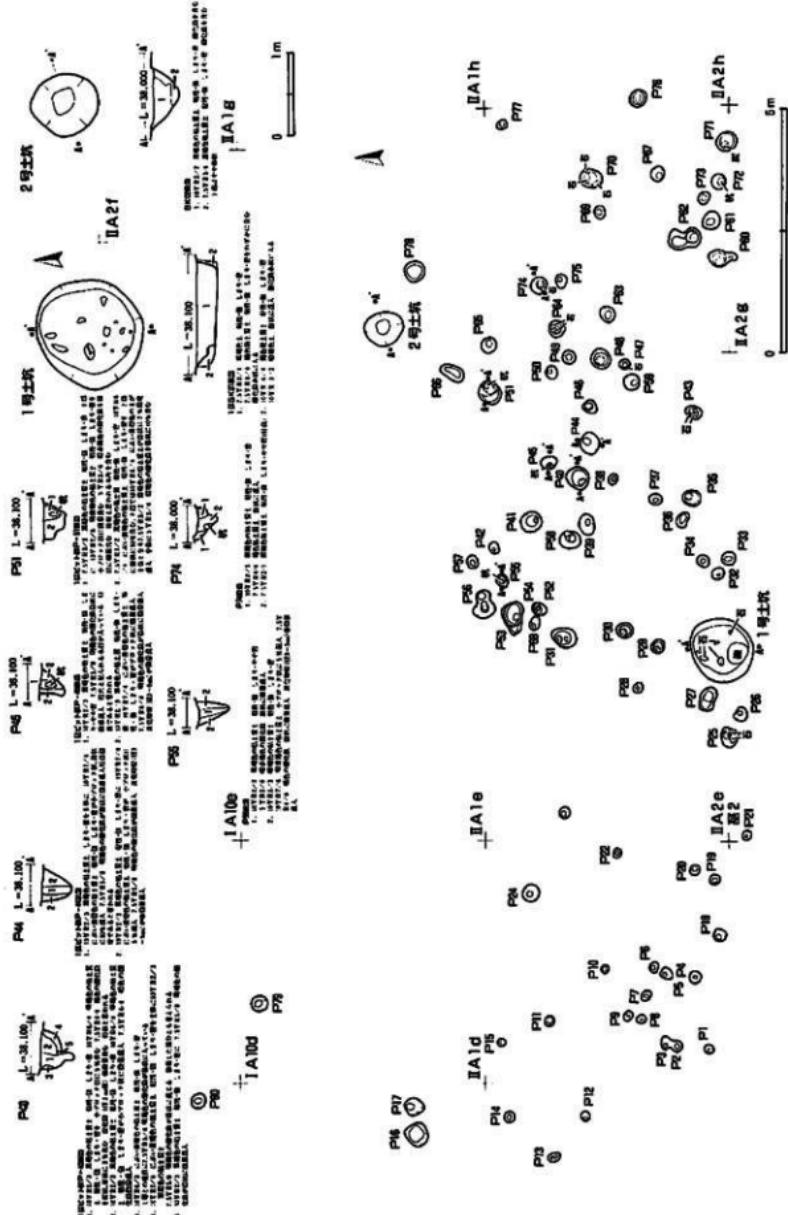
〈壁〉 やや丸みを帯びて外傾する。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 出土遺物がなく詳細は不明であるが、周囲の出土遺物の特徴や検出面等から判断し、縄文時代晩期以降のものと推定される。

2. 溝状遺構

調査区北側から溝状遺構3条が検出された。うち2条については調査区外に延びているため全容を解明するには至らなかった。検出面はⅡ層上面である。いずれの遺構からも出土遺物がないため、どの時代に属するものか確定することは困難である。規模、形状に関しては以下にまとめた。



第6図 1号土・第2号土坑、1区柱穴状坑群

第1号溝条遺構

〈位置〉 調査区北側南西隅、II A 2 c 区から II A 2 d 区にまたがって位置し、西側の壁から南の道路部分に向かって、やや湾曲しながら延び、さらに調査区外にも続いている。

〈検出状況〉 II 壁上面で検出された。

〈形状〉 平面形は緩やかに湾曲した帯状、断面形は浅鉢状、または皿形を呈する。

〈規模〉 長さは約 6 m、幅約 37~64 cm、深さ約 14~15 cm を測る。調査区外に延びているため全容については不明である。

〈埋土〉 2 層に細分される。1 層は暗褐色粘土質土を主体とし、下部に酸化鉄を帯状に含む。2 層は黒褐色粘土質土を主体として明黄褐色粘土質土が微量混入する。酸化鉄を含む。

〈底面〉 やや起伏があり。硬く緻まる。

〈壁〉 緩やかに立ち上がる。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 出土遺物がなく遺構の詳細は不明である。

第2号溝状遺構

〈位置〉 調査区北側の南端から中央部、I A 10 f 区、II A 1 f 区、II A 2 f 区のグリッド列に沿って位置している。南端から北に向かってほぼ直線的に延びている。

〈検出状況〉 II 壁上面で検出された。中央部から北方向にかけて延びていた可能性もある。

〈形状〉 平面形は細長い帯状で、断面形は皿形を呈する。

〈規模〉 長さは約 15.5 m、幅約 13~80 cm、深さ約 8~16.8 cm を測る。

〈埋土〉 黒褐色粘土質土と暗褐色粘土質土の混土である。酸化鉄を含む。

〈底面〉 やや起伏がある。

〈壁〉 外傾して立ち上がる。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 出土遺物がなく遺構の詳細は不明である。

第3号溝状遺構

〈位置〉 調査区北側北西隅の I A 4 b 区、I A 4 c 区に位置し、調査区西側の壁から北東に向かって延びている。

〈検出状況〉 II 壁上面精査中に検出された。南西→北東方向の調査区外に延びている。

〈形状〉 平面形は直線的な帯状、断面形は皿状を呈する。

〈規模〉 長さ約 3.2 m、幅約 105 cm~125 cm、深さ 11~17 cm を測る。

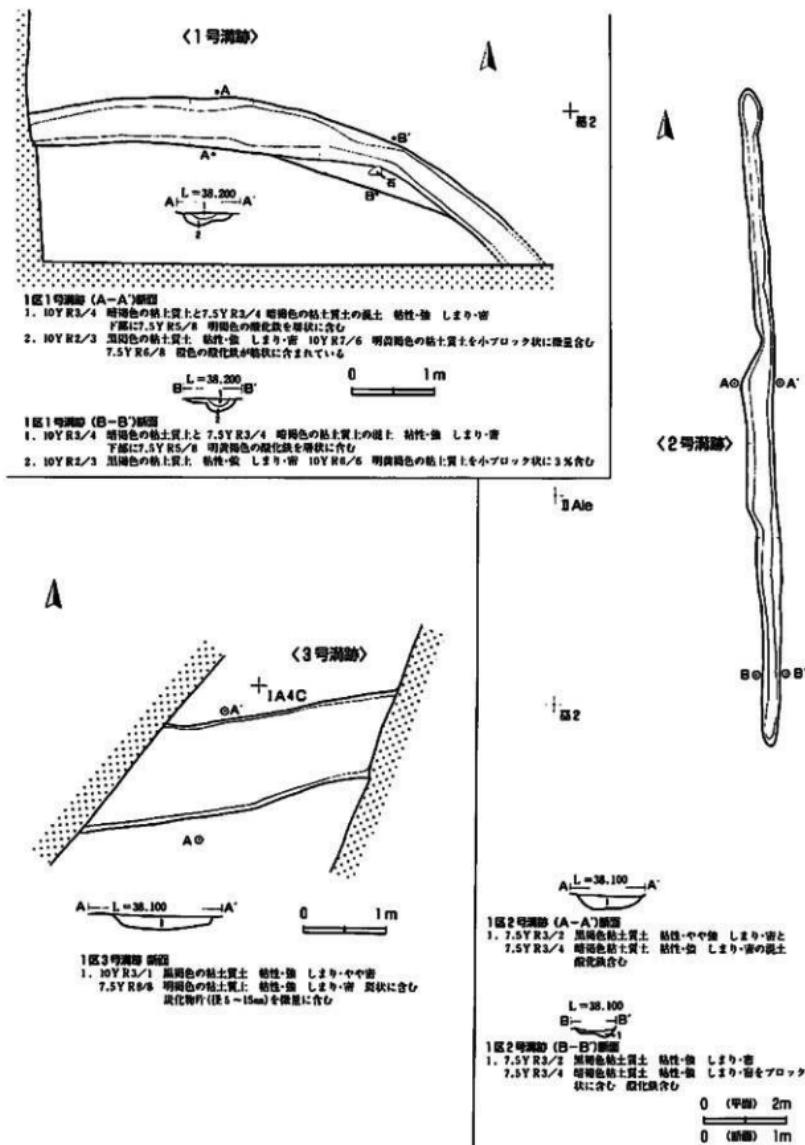
〈埋土〉 黒褐色粘土質土を主体とする単層で、明褐色の粘土質土、酸化鉄を含む。

〈底部〉 やや丸みを帯びているが、ほぼ平坦である。

〈壁〉 直立気味に立ち上がる。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 出土遺物がなく遺構の詳細は不明であるが、調査区外との境界の壁面 1 層相当部分から掘り込んだ痕跡が認められることから、比較的新しい遺構と推定される。



第7図 1号・2号・3号 溝跡

3. 柱穴状土坑

調査区北側（1区）南部において、大小の柱穴状ピットが計80基検出された。主にⅡA1d、ⅡA1e、ⅡA1f、ⅡA1g区にを中心とする区域に確認されたもので、検出面はⅡ層上面である。調査区北側（1区）で検出された遺構の大部分は、この区域に集中している。

これらの柱穴状土坑のうち、P54、P55、P56が新旧関係は不明であるが、第2号溝状遺構と切り合っている。またP2とP3、P53とP54が切り合っている。P2、P3については新旧関係は不明であるが、P53、P54では埋土の状態からP53の方が新しいものと思われる。

各柱穴状土坑の規模は、径約16~65cm、深さ約5~47.2cmと幅があり、規模が異なる。大部分の遺構の埋土は酸化鉄や褐色粘土質土を含む黒褐色粘土質土、または暗褐色粘土質土の単層である。径1~8mm程の炭化物を含むものも多い。住居の床面となる痕跡も確認されず、これらの配列等からは住居跡の柱穴とは断定できなかった。時期についても不明である。

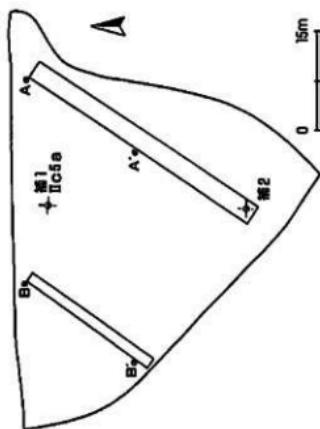
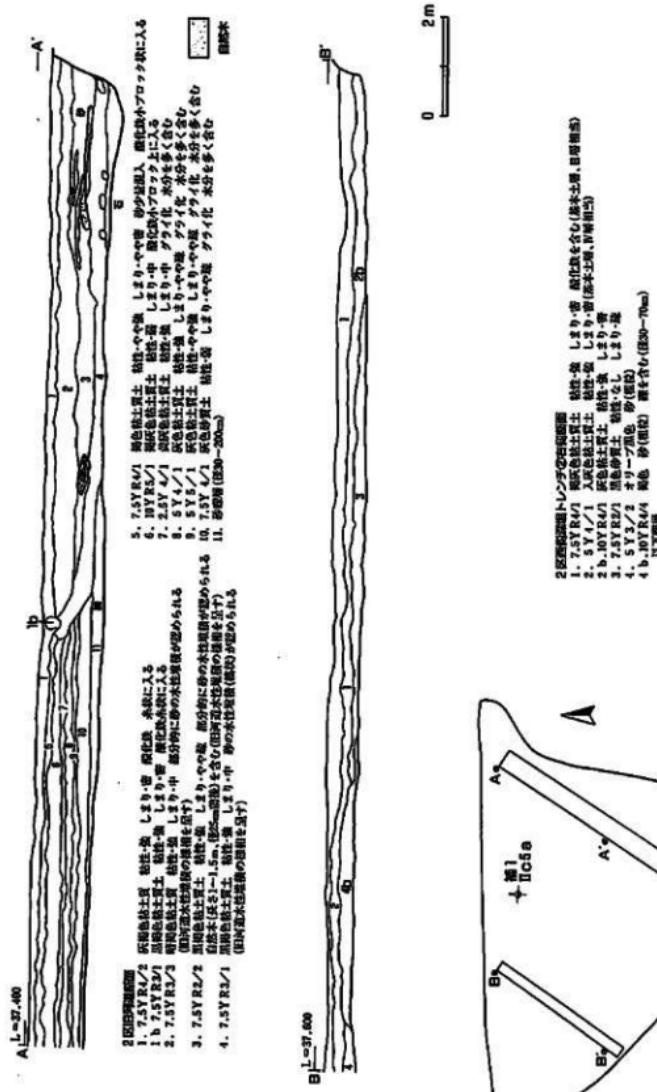
4. 旧河道

調査区南側（2区）東端に旧河道1ヶ所が確認された。旧河道はⅡC5c区からⅡC9c区以東の区域にあり、北西→南東方向に延びているものと思われる。確認された部分の長さは約27mである。断面は水性堆積の様相を呈しており、砂が層状に堆積している。旧河道内からは長さ150cmほどの自然木が発見されたのみである。隣接する東側の調査区外では水沢市埋蔵文化財調査センターが旧河道を確認しており、一連のものと思われる。

調査区北側（1区）西部においても同様にして旧河道の確認調査を行った。西部では旧河道をはっきりと確認することはできなかったものの、調査区全体が旧河道の何らかの影響を受けているものと推定される。

5. 遺物集中区

調査区南側（2区）においては遺構は検出されなかつたが、北部の道路際に本調査区では特に遺物が集中して出土した地域が確認された。（中コンテナ1箱程度）。グリッドではⅡB4g、ⅡB4h、ⅡB4i、ⅡB5f、ⅡB5g、ⅡB5h、ⅡB5i区に位置する。遺物の出土した層位は、基本層序のⅡ層に相当し、酸化鉄を含む黒褐色粘土質土を主体として構成されている層である。出土した遺物は土器、石器である。土器の特徴から判断して、縄文時代晩期から弥生時代に属するものと考えられる。石器は環石器、フレークを中心とする。遺構は検出されなかつたものの、上記の遺物の出土から判断し周辺地域に縄文時代晩期から弥生時代にかけての集落跡の存在が想定される。なお、遺物の取り上げにあたっては小グリッドごとに行っていいる。



第8圖 2區 旧河道跡

第4表 柱穴状土坑一覽表

	径(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形		径(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形
P 1	2.0×1.8	22.5	不整円	U字形	P 41	4.8×4.0	27.2	不整円	浅鉢形
P 2	2.5×2.2(推定)	21.5	不整円	V字形	P 42	2.6×2.2	20.0	不整円	V字形
P 3	2.9×2.0(推定)	25.5	不整円	V字形	P 43	3.2×24.5	40.0	不整円	円筒形
P 4	2.1×1.8	10.0	不整円	逆台形	P 44	4.2.5×4.1	35.6	不整円	V字形
P 5	2.8×1.8	22.0	楕円	U字形	P 45	3.4×2.7	28.1	楕円	円筒形
P 6	1.9.0	9.5	円形	逆台形	P 46	2.7×2.5	39.7	不整形	円筒形
P 7	2.3×2.0	20.4	不整円	U字形	P 47	2.0.0	36.2	円形	U字形
P 8	2.2×1.6	23.7	不整円	円筒形	P 48	3.9×3.7	36.0	不整円	U字形
P 9	2.2.5×1.6	18.6	不整円	U字形	P 49	27.5×2.5	18.0	不整円	逆台形
P 10	1.8.0	14.0	円形	U字形	P 50	2.4×2.0	17.4	不整円	逆台形
P 11	2.2×2.0	8.0	不整円	逆台形	P 51	5.0×4.1	26.8	不整円	浅鉢形
P 12	2.1×1.9	18.5	不整円	U字形	P 52	3.0×2.4	31.7	不整円	V字形
P 13	3.0×1.9	16.5	楕円	U字形	P 53	30×24(推定)	18.0	不整円	浅鉢形
P 14	2.2×1.9	9.6	不整円	逆台形	P 54	51×43(推定)	43.0	不整円	T字形
P 15	1.8×1.6	21.0	不整円	V字形	P 55	3.4×2.4	47.2	不整円	V字形
P 16	4.8×4.5	13.5	不整円	皿形	P 56	5.3×2.0	30.0	不整形	W字形
P 17	4.0×3.5	36.2	不整円	U字形	P 57	3.0×2.4	14.4	不整円	浅鉢形
P 18	2.8×2.1	20.5	不整円	U字形	P 58	4.5×3.7	—	不整円	—
P 19	2.0×1.8	15.2	不整円	U字形	P 59	34.0	26.0	円形	T字形
P 20	2.1×1.9	16.9	不整円	V字形	P 60	5.6×3.5	32.8	不整形	U字形
P 21	1.8×1.6	20.0	不整円	V字形	P 61	4.0×3.5	37.4	不整円	逆台形
P 22	1.8×1.7	9.9	不整円	逆台形	P 62	6.5×3.5	41.5	不整形	不整形
P 23	2.3×1.8	14.0	不整円	逆台形	P 63	3.6×3.1	40.2	不整円	逆台形
P 24	4.8.5×3.2	30.0	不整円	逆台形	P 64	3.5×3.3	22.2	不整円	浅鉢形
P 25	4.8×3.5	31.0	不整円	逆台形	P 65	3.0×2.9	33.2	不整円	逆台形
P 26	3.3×2.2	22.5	不整円	U字形	P 66	5.0×2.9	18.5	楕円	浅鉢形
P 27	5.1×2.0	29.8	楕円	円筒形	P 67	3.0×2.7	28.7	不整円	逆台形
P 28	2.2×1.9	18.0	不整円	V字形	P 68	2.9×2.0	17.8	楕円	V字形
P 29	2.8×2.6	22.8	不整円	浅鉢形	P 69	2.8×2.2	23.3	不整円	U字形
P 30	3.4×3.0	38.5	不整円	逆台形	P 70	4.9×3.8	5.2	楕円	皿形
P 31	5.2×4.1	28.0	楕円	浅鉢形	P 71	4.2×3.8	27.2	不整円	浅鉢形
P 32	2.6×2.0	27.5	不整円	V字形	P 72	30.5	40.0	円形	T字形
P 33	3.0×2.8	22.1	不整円	U字形	P 73	2.5×2.3	17.3	不整円	U字形
P 34	3.8×3.5	22.0	不整円	U字形	P 74	3.7×3.4	28.3	不整円	T字形
P 35	4.2.5×3.3	36.7	不整円	U字形	P 75	3.0×2.4	37.0	不整円	円筒形
P 36	3.2×1.9	9.7	不整円	皿形	P 76	3.6×3.2	13.0	不整円	浅鉢形
P 37	2.6×2.1	28.0	不整円	U字形	P 77	2.3×2.0.5	22.5	不整円	U字形
P 38	2.0×1.9	13.7	不整円	U字形	P 78	4.1×3.8	22.7	不整円	浅鉢形
P 39	4.6×3.4	37.0	不整円	V字形	P 79	3.2×3.0	20.0	不整円	U字形
P 40	4.7×4.3	41.5	不整円	浅鉢形	P 80	3.1×29.5	22.0	不整円	U字形

V. 遺構外出土遺物

1. 土 器

遺構外から出土した土器類の総量は、大コンテナ（42×32×30cm）1箱である。時期は縄文時代晩期から弥生時代にかけてのものである。土器の出土地点は、調査区南側（2区）の遺物集中区とした区域からのものが最も多い。土器の取り上げに当たっては、前述のとおり5×5mの小グリッド及び基本層序による層位毎に取り上げた。

ここでは、最近の土器年研究の成果を考慮に入れながら、縄文時代晩期中葉期後半をI群、縄文時代晩期末葉期から弥生時代初頭期をII群、弥生時代前期をIII群に時期区分した。

（第I群土器）縄文時代晩期中葉期後半に位置づけられる土器群である。従来の土器形式では、大洞C2式に相当するものと思われる。

（第II群土器）縄文時代晩期末葉期～弥生時代初頭期に位置づけられる土器群である。大洞A'式～砂沢式に相当するものと思われる。いわゆる変形工字文をもつI群である。

（第III群土器）弥生時代前期に位置づけられる土器群である。（小田野櫻年第I期に類似する）

32は大洞A'式の特徴をそのまま残している。50はつまみのある蓋と思われる。内外面とも煤が付着することから、煮炊き用に使用された可能性がある。一関市谷起島遺跡出土の土器と類似する。

2. 石器類

今回の調査で出土した石器は大コンテナ0.5箱で、これらの内、使用痕の認められない剝片類、破損及び風化の著しい礫石器を除く15点を実測掲載した。石器は器種ごとに以下のように分類した。

A. 石 錐

1点出土している。基部は欠損しているが、有茎錐と思われる。

B. 石 舀

1点出土している。一部欠損する。

C. 石 簾

1点出土している。一部欠損する。

D. 石 鋸

1点出土している。先端部が欠損しているものと思われる。

E. 不定形石器

上記以外の剝片石器を一括した。縁辺に加工痕が認められる石器である。

F. 石 斧

59は未製品と思われる。一部磨面がみられる。

G. 石 錘

60は着柄または握るための抉りを有するもので、扁平である。

H. 磨石・敲石・凹石類

これらを一括して扱い、複数の使用痕が認められる場合はそれぞれの組み合わせで細分した。自然理を利用し、擦る、敲く、潰すといった機能を有する石器である。

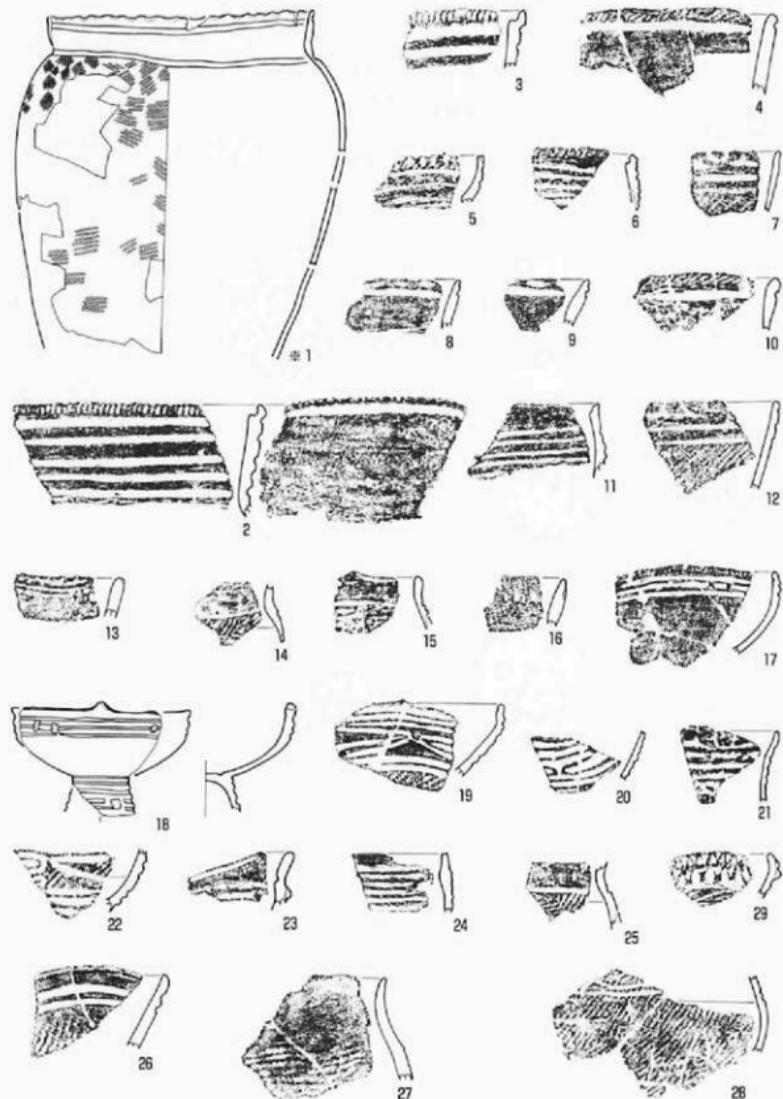
- I群 敲石……敲打痕を有する砾石器
- II群 凹石……凹みを有する砾石器
- III群 磨石と敲石の特徴を有する砾石器
- IV群 磨石と凹石の特徴を有する砾石器

3. 貨幣

2点出土した。66は北宋銭で、995年初鋤の「至道元寶」である。67は銘名不明であるが、「至道元寶」とほぼ同地点から出土していることから、北宋銭の可能性が高い。

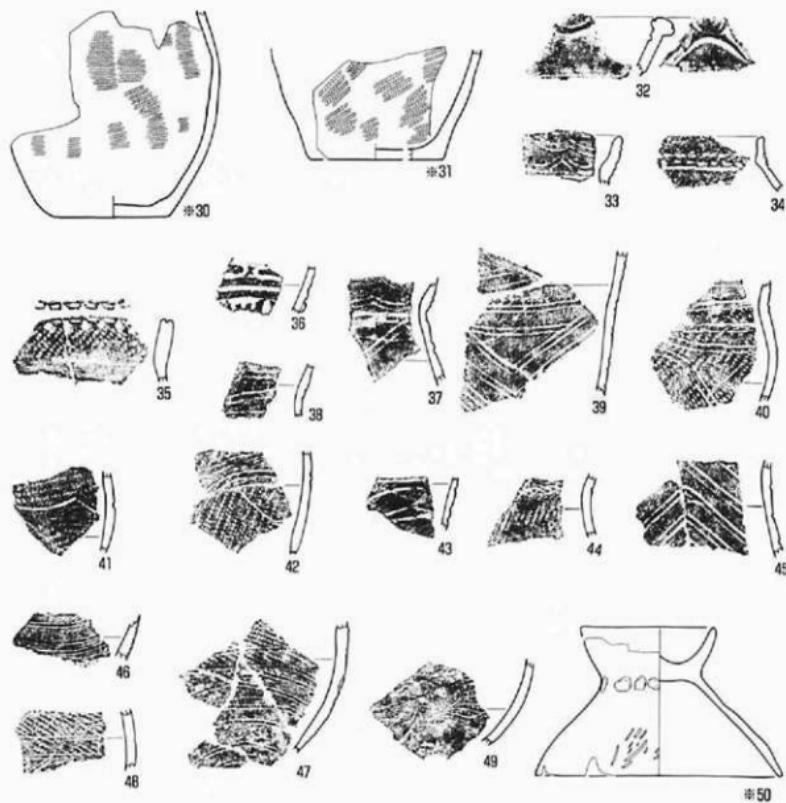
《参考・引用文献》

- 工藤竹久（1987）：「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72-4
仙台市埋蔵文化財調査センター（1999）：「杉の京遺跡」 仙台市埋蔵文化財調査センター報告書第13集
高橋信雄・小田野哲志・熊谷常正（1982）：「岩手の土器」 岩手県立博物館
藤沼邦彦：「亀ヶ岡式土器様式」純文土器大観4 小学館
戸沢光則編（1994）：「萬葉時代研究事典」 東京堂出版
仙台市埋蔵文化財調査事業団埋蔵文化財センター（1997）：「上鷹生遺跡発掘調査報告書」 岩槻文報告書第253集
仙台市立文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：「川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩槻文報告書第317集
青森県弘前市教育委員会（平成2年）：「砂沢遺跡発掘調査報告書」
岩手県立博物館（1987）：「岩手の弥生式土器概年試論」 岩手県立博物館研究報告第5号
岩手県立博物館（1989）：「東北地方北部における弥生文化受容層の様相」 岩手県立博物館研究報告第7号
伊藤信雄（1974）：「水沢地方の弥生式土器」 水沢市史1
須藤 隆（1996）：「東北地方の弥生土器」「日本土器事典」 雄山閣
角木道之介（1991）：「石器入門事典」 岩谷書店
阿子島香（1989）：「石器の使用痕研究」 考古学ライブラリー-56
日本貨幣商議同組合（1973）：「貨幣手帳」 順文社



第9図 遺構外出土遺物(1)

$S=1/2$
 $\ast S=1/4$



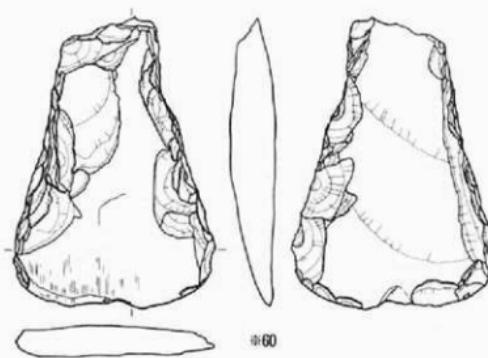
$S=1/2$
 $\#S=1/3$

第10図 造構外出土遺物 (2)

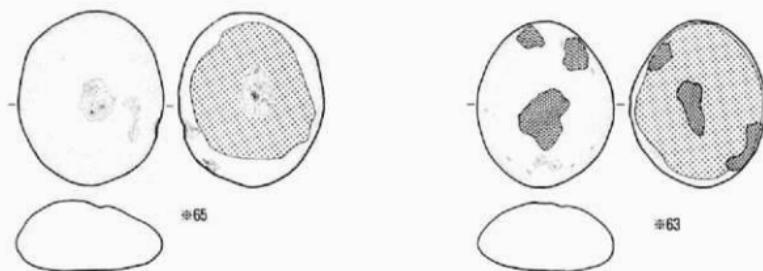


第11図 遺構外出土遺物(3)

$S=1/2$
 $*S=1/3$

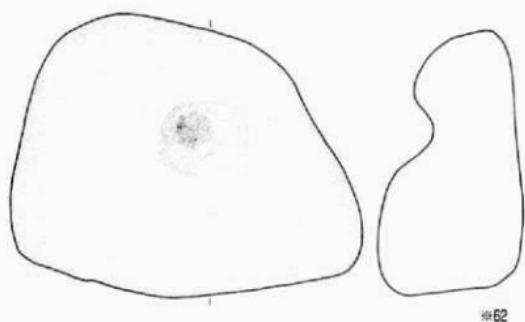


*60



*65

*63



*62



66



67

$S=1/2$
 $\diamond S=1/3$

第12図 遺構外出土遺物 (4)

第5表 土器觀察表

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
1	II B 5f II層	深鉢	口～体部	小波状口縁、頸部沈線、LR、胎土粗粒	ナデ	I
2	II B 4h II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、胎土粗粒、3と同一個体	ナデ	I
3	II B 4h II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、胎土粗粒	ナデ	I
4	IA 9d II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、砂粒含む	ナデ	I
5	II B 5g II層	鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、LR	ナデ	I
6	IA 10e II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、小穢含む	ナデ	I
7	II B 8i II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、LR	ナデ	I
8	IA 8e II層	深鉢	口縁部	刺突、沈線、砂粒含む	ナデ	I
9	IA 7f II層	鉢	口縁部	刺突、沈線、砂粒含む	ナデ	I
10	IA 9d II層	深鉢	口縁部	口唇部原体近似、沈線		I
11	IA 9e II層	深鉢	口縁部	口唇部内面沈線、外面5条沈線、砂粒含む	ナデ	I
12	II B 8i II層	深鉢	口縁部	沈線、LR、砂粒含む		I
13	II B 6j II層	深鉢	口縁部	2条沈線、小穢含む	ナデ	I
14	II B 5g II層	鉢	口縁部	沈線、LR	ナデ	I
15	IA 4c II層	鉢	口縁部	小山形口縁、沈線、砂粒含む	ミガキ	I
16	II B 4i II層	深鉢	口縁部	口縁部棒状刺突、LR、黒斑あり	ナデ	I
17	BA 1g II層	鉢	口～体部	口唇部刻み、内外沈線、工字文	ミガキ	I
18	IA 10e II層	台付浅鉢	口～底部	口唇部小突起、3条沈線、底部沈線、内面底部沈線	ミガキ	II
19	II B 5f II層	鉢	口縁部	変形工字文、LR	ナデ	II
20	II B 4d II層	鉢	口縁部	変形工字文	ミガキ	II
21	II B 6g II層	鉢	口縁部	変形工字文	ミガキ	II
22	IA 10g II層	鉢	体部	変形工字文、LR	ナデ	II
23	II B 5f II層	鉢	口縁部	山形口縁、変形工字文?	ナデ	II
24	II B 5e II層	鉢	口縁部	口縁内外沈線	ナデ	II
25	II B 7e II層	鉢	口縁部	沈線、LR、砂粒含む	ナデ	II
26	II B 4f II層	深鉢	口縁部	口縁部2条沈線	ナデ	II
27	II B 5i II層	深鉢	口縁部	LR、胎土粗粒	ナデ	II
28	II B 5i II層	鉢	体部	黒斑あり	ナデ	II
29	II B 4h II層	鉢	口縁部	刺突、貼付け、沈線	ナデ	II
30	IA 7e II層	鉢	体～底部	LR、砂粒含む	ナデ	II
31	II B 6j II層	深鉢	体～底部	LR、黒斑あり	ナデ	II
32	II B 4f II層	深鉢	口縁部	山形口縁、内面沈線	ナデ	II
33	II B 6f II層	鉢	口縁部	沈線、黒斑あり	ナデ	II
34	II B 5i II層	鉢	口縁部	刺突、沈線	ナデ	II
35	II B 5f II層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、LR	ナデ	II
36	II B 5g II層	鉢	体部	変形工字文、貼付け、刻み	ナデ	II
37	II B 4b II層	鉢	口縁部	沈線、黒斑あり 37-42同一個体か	ナデ	II
38	II B 6i II層	鉢	体部	沈線、LR	ナデ	II
39	II B 6f II層	鉢	体部	沈線、黒斑あり	ナデ	II
40	II B 6i II層	鉢	体部	沈線、LR、黒斑あり	ナデ	II
41	II B 6f II層	鉢	体部	沈線、LR	ナデ	II
42	II B 6f II層	鉢	体部	沈線、LR	ナデ	II
43	II B 5i II層	鉢	体部	沈線	ナデ	II
44	II B 4g II層	鉢	体部	LR、胎土粗粒	ナデ	II
45	II B 6f II層	鉢	体部	沈線	ナデ	II
46	II B 5j II層	浅鉢	体部	沈線、砂粒含む	ナデ	II
47	II B 5j II層	浅鉢	体部	条線、LR、砂粒含む	ナデ	II
48	II B 5j II層	深鉢	体部	条線、LR、砂粒含む	ナデ	II
49	II B 5f II層	浅鉢	体部	条線、胎土粗粒	ナデ	II
50	II B 8h II層	蓋	暗完形	内外面煤付着、砂粒含む	ナデ	II

第6表 石器調査表

番号	出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質(山地)	備考
5.1	第1号土坑堆上中	不定形石器	3.4	2.6	0.8	3.0	頁岩(奥羽山脈)	加工痕
5.2	II B 4f II層	石錐	3.7	2.1	0.9	5.7	メノウ(奥羽山脈)	基部欠損
5.3	II B 5g II層	石匙	3.7	2.6	0.8	4.1	頁岩(奥羽山脈)	欠損
5.4	II B 5j II層	石匙	6.2	4.2	1.8	48.1	赤色頁岩(奥羽山脈)	欠損
5.5	II B 5f II層	石錐	4.2	3.7	0.8	12.5	頁岩(奥羽山脈)	先端部欠損
5.6	II B 5j II層	不定形石器	6.0	8.3	1.7	87.8	頁岩(奥羽山脈)	加工痕
5.7	IA 10g II層	不定形石器	5.2	2.8	0.7	10.2	頁岩(奥羽山脈)	2縁刃部加工
5.8	II A 2g II層	不定形石器	2.9	2.7	0.8	7.9	頁岩(奥羽山脈)	加工痕
5.9	II B 4g II	石斧	12.9	6.0	4.0	566.0	閃緑岩(北上山地)	未製品、磨面あり
6.0	II B 9j II層	石錐	17.6	12.1	2.7	680.6	凝灰岩(北上山地)	
6.1	II B 8i II層	敲石	13.4	5.4	2.3	304.5	安山岩(奥羽山脈)	
6.2	II A 2e II層	凹石	21.2	17.0	8.7	4960	安山岩(奥羽山脈)	
6.3	II B 4i II層	磨石+鐵石	10.0	8.2	4.2	476.9	安山岩(奥羽山脈)	
6.4	II B 9i II層	磨石+凹石	8.3	5.7	4.1	267.3	安山岩(奥羽山脈)	
6.5	II B 5j II層	磨石+凹石	10.5	9.8	4.3	544.3	安山岩(奥羽山脈)	

第7表 貨幣調査表

番号	出土地点・層位	銭名	材質	直径cm	穿孔cm	厚さcm	重量g	初鋤年代	その他の
6.6	IA 9e II層	至道元寶	銅	2.40	0.60	0.10	2.97	中国北宋	995年
6.7	IA 9e II層	銭名不明	銅	2.35	0.60	0.10	2.92	不明	

写 真 図 版

(平成12年度調査)



遺跡遠景



1区全景

写真図版1 遺跡遠景・1区全景



2区全景

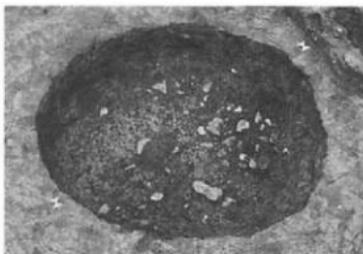


1区 基本土層

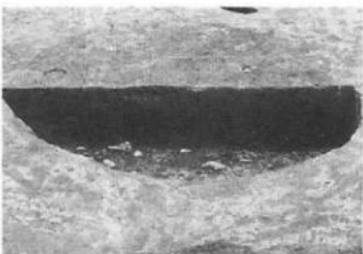
写真図版2 2区全景・1区基本土層



2区 基本土層



1号土坑 平面



1号土坑 断面



2号土坑 平面



2号土坑 断面

写真図版3 2区基本土層・1・2号土坑



1号溝跡 平面



1号溝跡 断面 (A-A')



1号溝跡 断面 (B-B')



2号溝跡 平面



2号溝跡 断面 (A-A')



2号溝跡 断面 (B-B')

写真図版4 1号・2号溝跡



3号溝跡 平面



3号溝跡 断面(A-A)



2区 旧河道



2区 旧河道



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

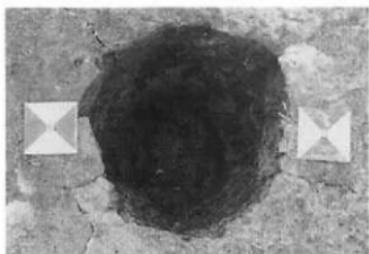


作業風景

写真図版5 3号溝跡・2区旧河道



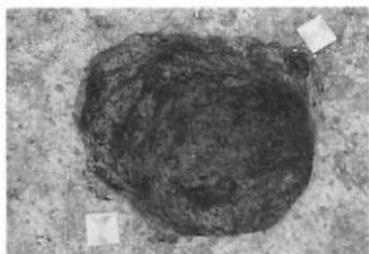
1区 柱穴状土坑群



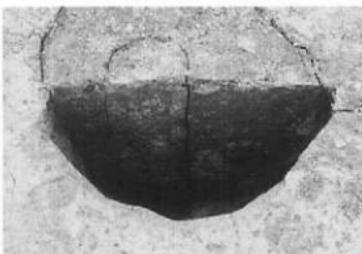
1号柱穴状土坑 平面



1号柱穴状土坑 断面

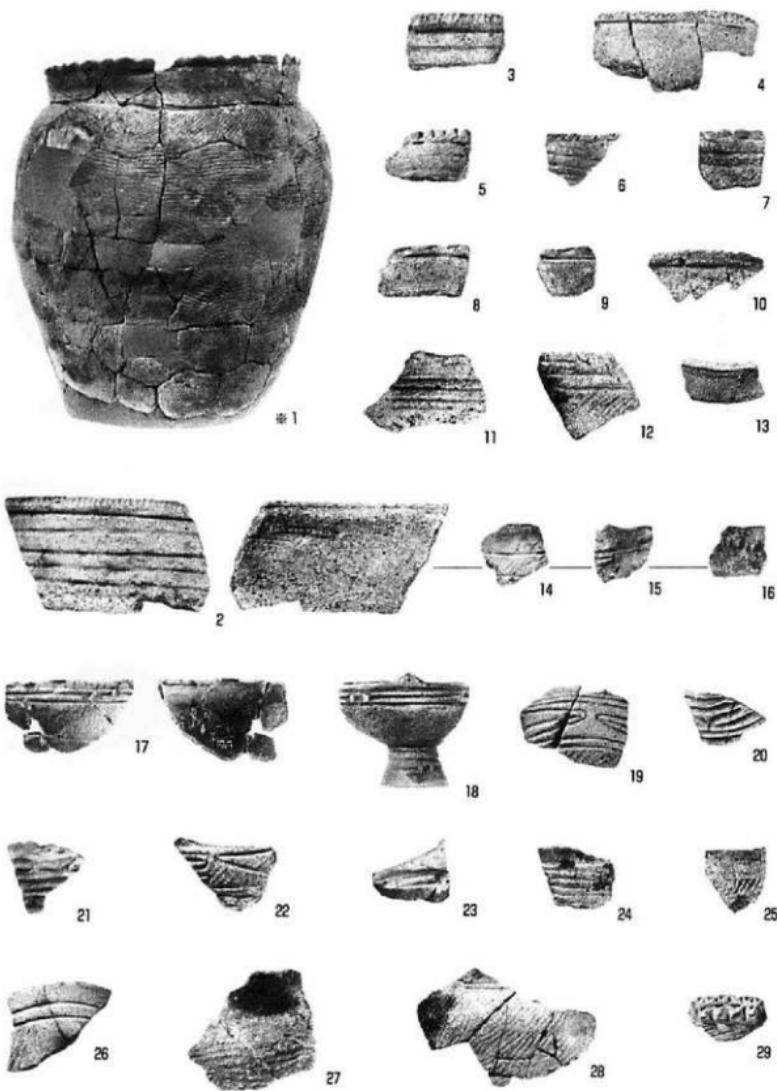


44号柱穴状土坑 平面



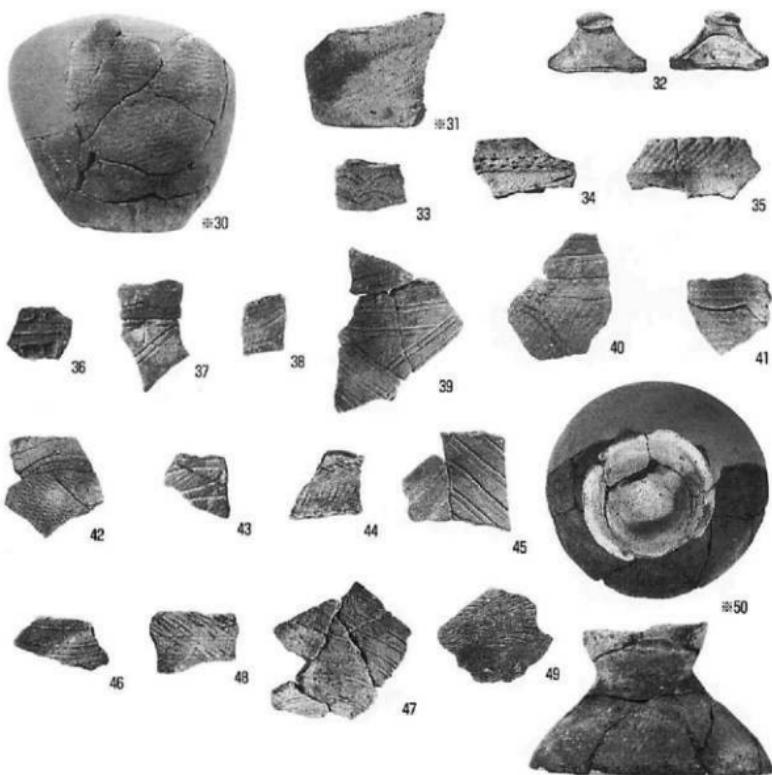
44号柱穴状土坑 断面

写真图版 6 柱穴状土坑群



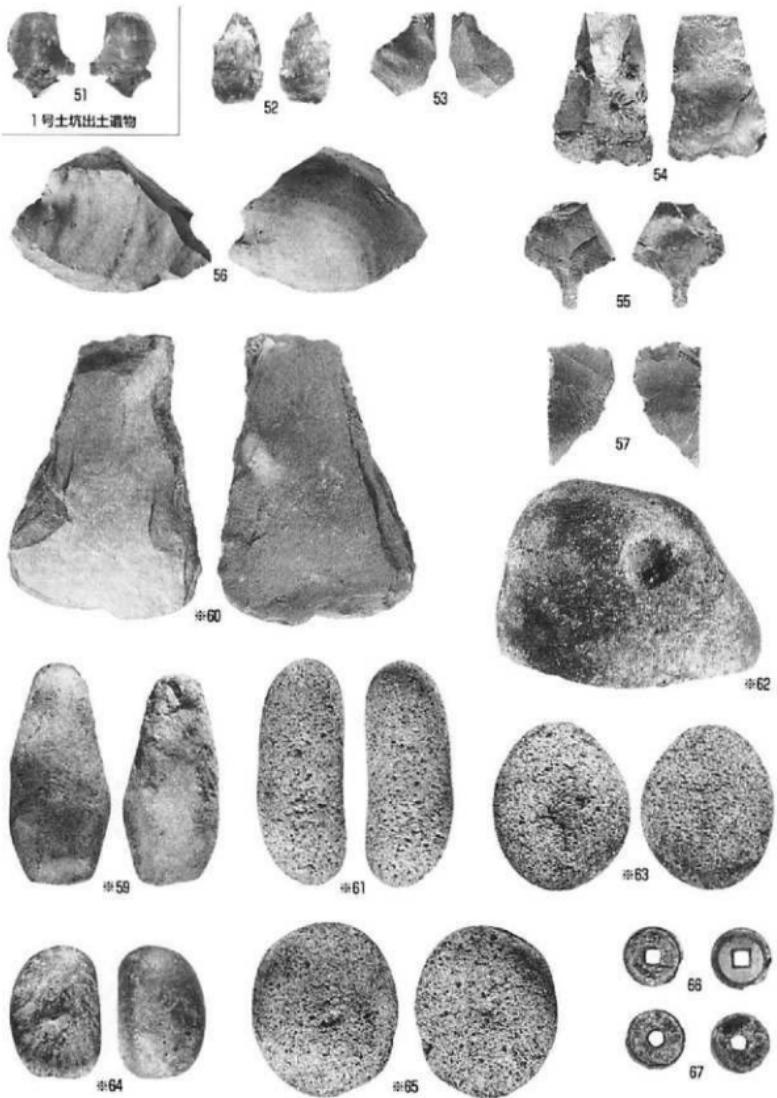
写真図版 7 遺構外出土遺物 (1)

$S=1/2$
 $*S=1/4$



S=1/2
+S=1/3

写真図版 8 遺構外出土遺物 (2)



写真図版9 遺構内・外出土土器

$S=1/2$
 $\oplus S=1/3$

平成13年度調査

VI. 検出された遺構と遺物

1. 溝状遺構

今年度の調査区（3区）から溝跡が3条検出された。検出面はⅢ層であるが、中には疊層を切って掘り込まれているものもあり、時期は比較的新しい（近世以降）ものと考えられる。遺物は5号溝跡から陶器片が1点と漆塗りの椀が1点出土している。遺構の用途・性格については水路等の可能性も考えられるが詳細は不明である。規模・形状については以下にまとめた。なお、遺構名及び遺構番号は昨年度のものから継続して付している。

第4号溝状遺構

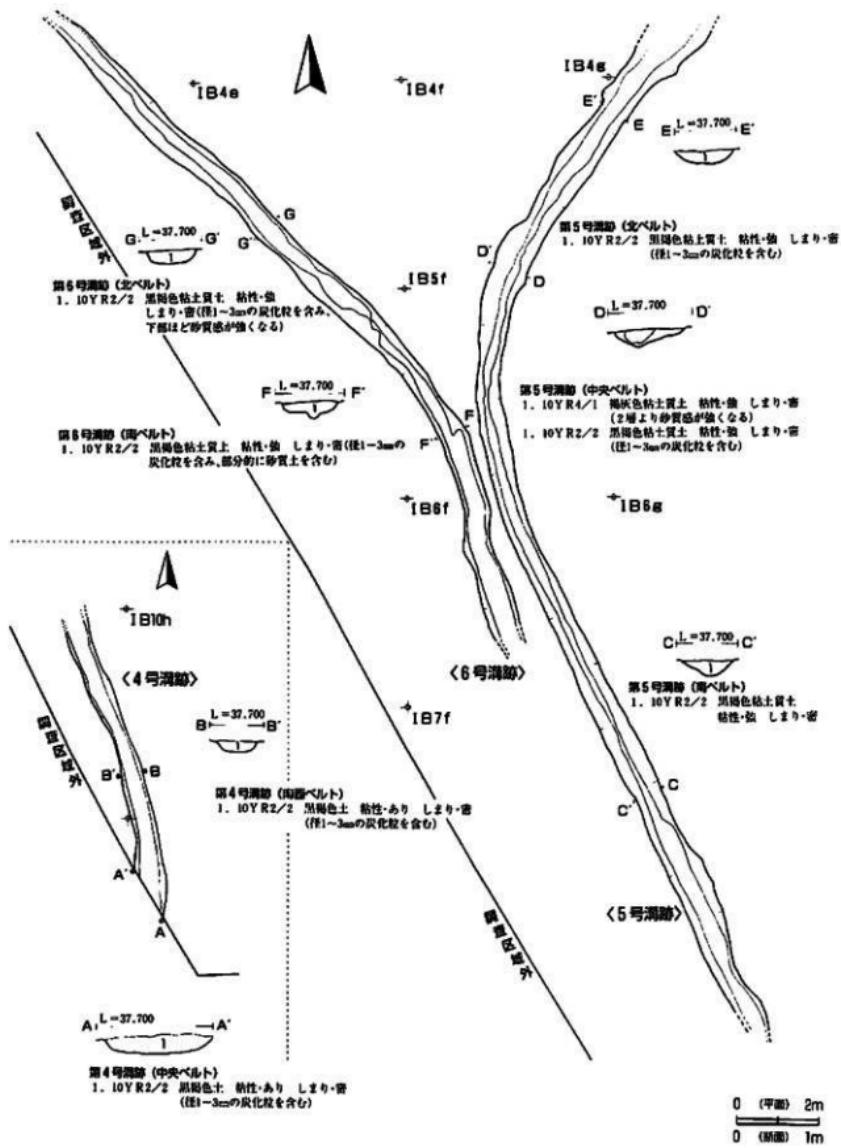
- 〈位置〉 IB 9 g ~ IB 1 h 区にわたって位置している。
- 〈検出状況〉 表土を除去した後のⅢ層上面で検出した。Ⅱ層は見られない。北端は疊層によって確認できない。
- 〈形状〉 平面形は帯状にはば直線的に延び、確認できない。断面形はU字状をしている。
- 〈規模〉 長さは約7m、幅0.4~1.3m、深さ7~13cmを測る。
- 〈埋土〉 単層である。
- 〈床面〉 ほぼ平坦である。
- 〈壁〉 細やかにやや外傾して立ち上がる。
- 〈出土遺物〉 遺物は出土していない。
- 〈時期〉 時期は不明である。

第5号溝状遺構

- 〈位置〉 IB 4 f · IB 5 f · IB 6 f · IB 7 g · IB 8 g 区にわたって位置している。南東-北西方向に直線的に延びるが、IB 5 f 区で北東-南西方向に緩やかに方向が変わる。
- 〈検出状況〉 表土を除去したⅢ層上面で検出した。Ⅱ層は見られない。南東端は疊層によって確認できないが、第4号溝跡につながる可能性も考えられる。
- 〈形状〉 平面形は細い帯状で、断面形は浅いV字形とU字形が確認できる。
- 〈規模〉 長さは約26m、幅60~90cm、深さ14~25cmを測る。
- 〈埋土〉 場所によっては2層に分けられる所もあるが、単層を基本とする。
- 〈床面〉 凹凸は見られず、ほぼ平坦である。
- 〈壁〉 細やかに外傾して立ち上がる。
- 〈出土遺物〉 中央ベルト北側から漆塗りの椀1点と北東端から釉薬のかかっていない陶器片1点が出土している。器種は鉢と思われ、体部下部に沈線が施されている。
- 〈時期〉 詳細は不明であるが近世以降と思われる。

第6号溝状遺構

- 〈位置〉 IB 3 d · IB 4 e · IB 5 e · IB 5 f · IB 6 f 区にわたって位置している。
- 〈検出状況〉 表土を除去した後のⅢ層上面で検出した。Ⅱ層は見られない。北西端は疊層を切って掘り込まれている。



第13図 4号・5号・6号洞跡 (3区)

- 〈形 状〉 平面形は細い帯状をしている。IB5f区で第5号溝跡に近接し、北西方向へ直線的に伸びる。断面形はU字状をしている。
- 〈規 模〉 長さ約19m、幅45~70cm、深さ17~28cmを測る。
- 〈埋 土〉 単層である。
- 〈床 面〉 一部に凹凸が見られる部分もあるが、ほぼ平坦である。
- 〈 壁 〉 やや外傾して緩やかに立ち上がる。
- 〈出土遺物〉 遺物は出土していない。
- 〈時 期〉 時期は不明である。

2. 遺物集中区

遺構は検出されなかつたが、調査区北側に遺物が比較的多く出土する地域が確認された。小グリッドでいうところのIB2d・2e・2f・2g・3d・3e・3f・3g・4e・4f区にまたがる区域である。遺物の出土した層位は基本層序のⅡ層に相当する層で、酸化鉄が糸状に混入する黒色土が主体である。

出土した遺物は土器・石器で、土器は一部に(略)完形になるものも見られるが、多くが小片である。時期は縄文時代晚期(大洞A~A'式)~弥生時代に属するものが多く、僅かに土師器片も含まれている。石器は剥片石器の未製品と砾石器である。遺物は小グリッド毎に取り上げている。

3. 出土した遺物

(1) 土器について

今年度の調査で出土した土器は大コンテナ(T40:30×40×30cm)で約1箱であるが、その大部分が遺構外からの出土であり、遺構から出土した遺物はNo.1、No.2の2点のみである。遺構外から出土した土器の時期は縄文時代晚期に属するものが中心で、弥生土器・土師器が僅かに含まれている。これら遺構外から出土した土器については次のように分類した。

I群…縄文時代晚期後葉に属し、大洞A式もしくはA'式に該当すると思われる土器

II群…詳細は不明であるが縄文時代晚期に属すると思われる粗製及び精製土器

III群…弥生時代に属すると思われる土器

IV群…土師器

• I群の土器 (No.3~25)

縄文時代晚期後葉の土器で大洞A式~A'式に相当する土器である。器種は鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺が見られる。No.3~No.15は鉢の口縁部である。No.3~No.4は口縁部に4~5本の平行沈線が見られ、さらに口縁部内側に1本の沈線が確認できる。No.5~No.6は口唇部に押圧状の刻みが見られ、口縁部には1本もしくは2本の沈線で区画された無文帯が確認できる。さらに、体部には縄文が、口縁部内側には1本の沈線が施されている。No.7~No.8は口唇部から口縁部にかけて無文であり、比較的丁寧に磨かれている。これまでと同様に口縁部内側に1本の沈線が見られるほか、口唇部にも1本の沈線が施されている。No.9~No.12は口唇部に突起が見られる。やはりこれらにも口縁部内側に1本の沈線が施されている。また、No.9は口縁部に5本の平行沈線が確認できる。No.10は口唇部に1本の沈線が施されているほか、体部には3本の平行沈線と工字文が見られる。No.11は口唇部に2個1対と思われる突起が確認できる。口縁部には1本の

が施され、沈線より上は無文である。No.12は口唇部に1本の沈線が施されているが、口縁部は無文である。No.13～No.15にも口縁部内側に1本の沈線が施されている。口唇部には突起は見られないがNo.14・No.15には上方向からの沈線が施されている。いずれも体部に工字文が確認できる。No.16・No.17は鉢の体部である。どちらも上部に平行沈線が確認でき、それ以下は繩文が施されている。No.18・No.19は浅鉢の口縁部である。いずれも4本の平行沈線が確認でき、内側には1本の沈線が施されている。No.20～No.24は内付浅鉢である。No.20は口縁～脚部、No.21・No.22は口縁部である。No.20は口縁部に3本の平行沈線が、内側にも1本の沈線が確認できる。体部は無文であるが、脚部には口縁部と同様の平行沈線を基調とした文様が施されている。No.21は口唇部に2個1対の突起を有している。No.22には突起は見られないが様相がNo.21と類似しており、同一個体となる可能性もある。No.23・No.24は脚部であるが、やはり平行沈線を基調とした文様が施されている。また、No.20・No.23・No.24の内側底面には円形を描く沈線が確認できる。No.25は壹の口縁～頭部である。口縁部内側には1本の沈線が施されるほか、口縁上部及び頭部下部には平行沈線が見られるが、頸部は無文である。

・ II群の土器 (No.26～44)

縄文時代晩期に属すると思われるが詳細が不明な粗製土器及び少數の半精製土器を一括した。器種は鉢及び深鉢である。No.26は粗製の深鉢の略完形である。体部全面に繩文が施されるほか他の特徴は見られない。No.27～No.35は粗製深鉢の口縁部である。いずれも口唇部に押圧状の压痕が確認できるほか、1本もしくは2本の沈線で区画された範囲が無文である。また、No.27・No.31・No.32の口縁部内側には1本の沈線が確認できる。No.36・No.37は粗製深鉢の体部で、繩文のみが施されている。No.38～No.42は粗製の鉢及び深鉢の底部である。No.38・No.39は体部に繩文が確認できるが、他は磨滅が激しく詳細は不明である。また、No.40・No.42には底部外面に網代痕が確認できる。No.43は半精製の浅鉢の底部、No.44は同様に半精製の鉢の口縁～体部～底部である。体部は無文であるが、底部外面には網代痕が確認できる。

・ III群土器 (No.45～50)

弥生土器に属すると思われるものを一括したが、全て小破片であり詳細は不明である。器種は全て鉢である。No.45は鉢の口縁部で、細い棒状工具による刺突文が施されている。No.46も鉢の口縁部であり、細い棒状工具によるとと思われる細線文が口縁上部に施されている。No.47は鉢の口縁下部～体部である。口縁下部には2段の波状沈線文が確認できる。No.48は鉢の体部である。細かい繩文を施した後丸みを帯びた棒状のT工具による沈線が施されている。No.49・No.50は鉢の底部である。どちらも体部には繩文が施され、底部外面は比較的丁寧に磨かれている。

・ IV群土器 (No.51～52)

土師器を一括したが、すべて小破片であり、特徴的なもの2点を掲載した。No.51は壺の体部下部～底部で、内面に黒色処理が施されている。No.52も壺の底部と思われるが、底部外面に回転糸切り痕が確認できる。

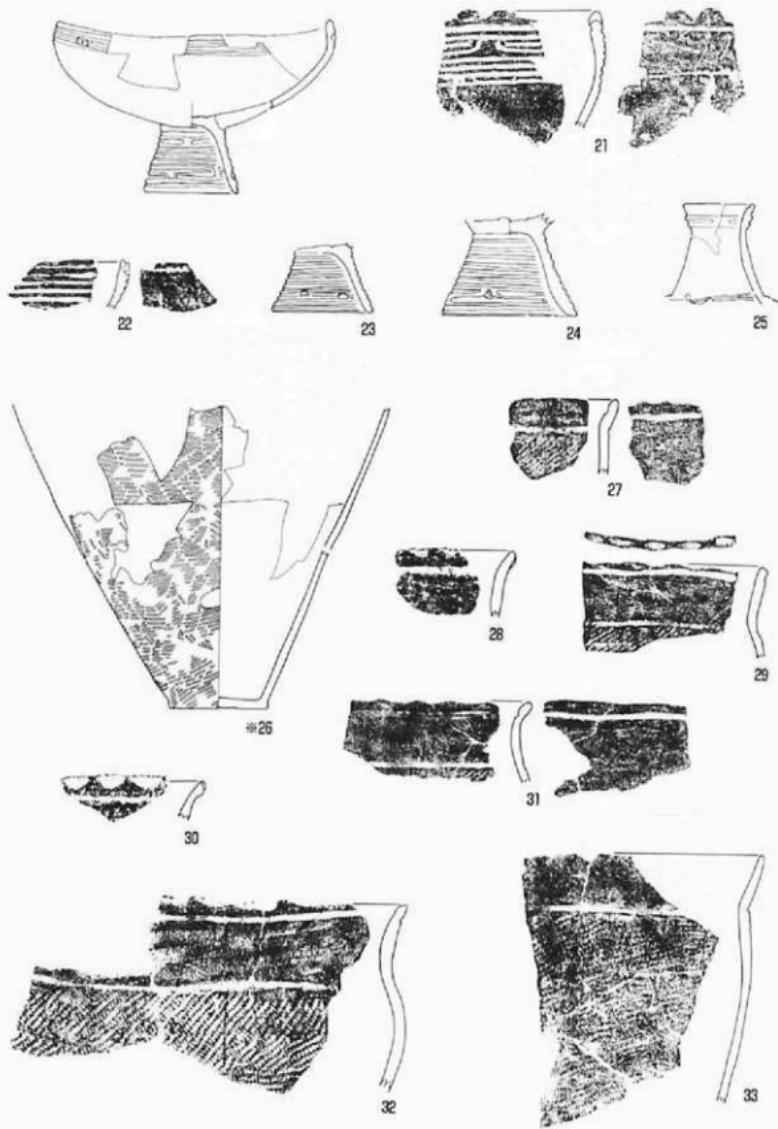
(2) 銭貨について

試掘段階で表土より「紹聖元寶」1枚が出土した。1094年鋳造とされる北宋錢で、書体は篆書である。背面に月文や星文を持つものもあるが、本錢は無文である。



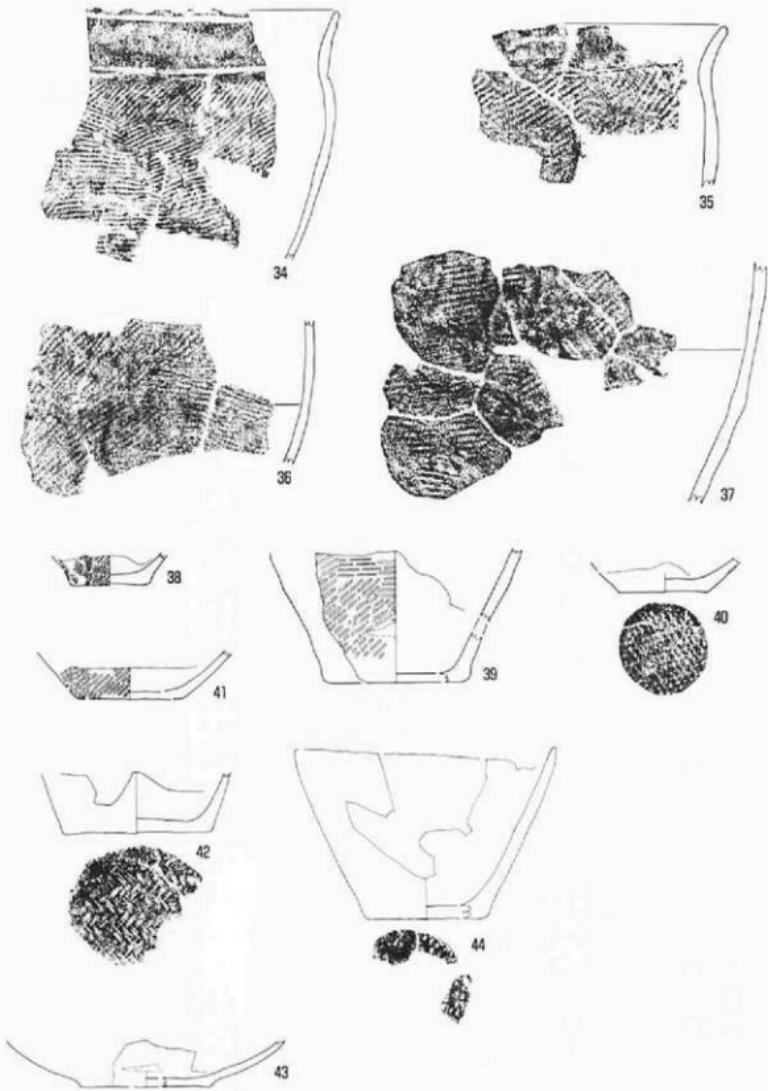
第14図 遺構内・遺構外出土遺物 (1)

S=1/3



第15図 遺構外出土遺物 (2)

$S=1/3$ (No.26のみ $S=1/4$)



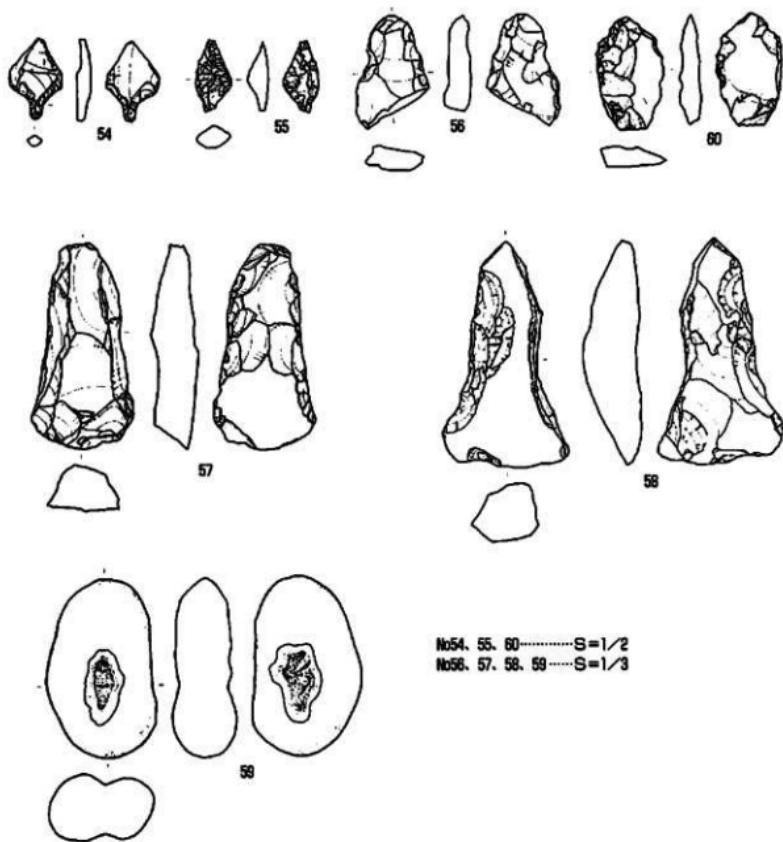
第16図 遺構外出土遺物 (3)

S=1/3



S=1/2

第17図 遺構外出土遺物(4)



第8表 石器調査表

番号	器種	出土地點	長さmm	幅mm	厚さmm	質屈名	石質	備考
1 54	石核	トレンチⅡ層	31.5	21	5	2.93	頁岩	奥羽山脈
2 55	石核	I B3g Ⅰ層	28.5	14.5	9	2.73	頁岩	奥羽山脈
3 56	明器	I B1e Ⅱ層	66.5	44	15.5	41.56	頁岩	奥羽山脈
4 57	打削石器	I B8n Ⅱ層	122.5	61.5	29	238.48	頁岩	北上山地
5 58	打削石片	I B1e Ⅱ層	133	75	40	268.16	フォルンフェルス	北上山地
6 59	凹石	I B2e Ⅰ層	直径106	直径66	40	282.10	石英安山岩	奥羽山脈
7 60	剥片(二次加工)	トレンチⅡ層	44.5	27	9	11.68	頁岩	奥羽山脈

第18図 造橋外出土遺物

第9表 遺物観察表(1)

番号	出土地点	器種	部位	特徴	分類
1	第5号溝跡	鉢?		第11表参照	
2	第5号溝跡	漆器椀		第12表参照	
3	I B 2f 2層	鉢	口縁部	4条の平行沈線 口縁内面に横位沈線	I群
4	I B 8h 2層	鉢	口縁部	5条の平行沈線 口縁内面に横位沈線	I群
5	I B 1d 2層	鉢	I縁部	口唇部に押圧状刻目 口縁内面に横位沈線	I群
6	I B 2e 2層	鉢	口縁部	口唇部に押圧状刻目 口縁内面に横位沈線	I群
7	I B 2f 2層	鉢	口縁部	口唇部に沈線	I群
8	I B 2e 2層	鉢	I縁部	口縁部暗き 口唇部に沈線	I群
9	I B 2d 2層	鉢	口縁部	口唇部突起 5条の平行沈線	I群
10	I B 2d 2層	鉢	口縁部	口唇部突起 工字文 口唇部沈線	I群
11	I B 2e 2層	鉢	口縁部	口唇部に2個1対? の突起 口縁部昌文	I群
12	I B 2e 2層	鉢	口縁部	口唇部突起・沈線 I縁部無文	I群
13	I B 2d 2層	鉢	口縁部	工字文	I群
14	I B 2f 2層	鉢	口縁部	工字文 口縁内面に横位沈線 口唇部に沈線	I群
15	I B 2f 2層	鉢	口縁部	工字文? 口縁内面に横位沈線 口唇部に沈線	I群
16	I B 1d 2層	鉢	体部	工字文?	I群
17	I B 2f 2層	鉢	体部	平行沈線 体部地文	I群
18	I B 2f 2層	浅鉢	I縁部	4条の平行沈線 口縁内面に横位沈線 体部地文	I群
19	I B 2f 2層	浅鉢	I縁部	4条の平行沈線 口縁内面に横位沈線 体部地文	I群
20	I B 8b 2層	台付浅鉢	略定形	3条の平行沈線 底面に円文 脚部に深い沈線文	I群
21	I B 2d 2層	台付浅鉢	口縁部	I縁部に2個1対の突起 口縁部に8条の沈線文	I群
22	I B 2f 2層	台付浅鉢	口縁部	口縁部に複数の沈線文	I群
23	I B 2d 2層	台付浅鉢	脚部	底面に円文 脚部に深い沈線文	I群
24	I B 8h 2層	台付浅鉢	脚部	底面に円文 脚部に深い沈線文	I群
25	II B 2h 2層	壺	口縁~頸部	I縁・頸部に平行沈線文	I群
26	I B 2d 2層	深鉢	略定形	体部地文のみ	II群
27	I B 1c 2層	深鉢	口縁部	口唇部波状 太い横位沈線 口縁内面に横位沈線	II群
28	I B 1d 2層	深鉢	口縁部	口唇部波状	II群
29	I B 2f 2層	深鉢	口縁部	口唇部押圧状圧痕 横位沈線 口縁部無文	II群
30	I B 3d 2層	深鉢	口縁部	口唇部押圧状圧痕	II群
31	I B 3f 2層	深鉢	I縁部	口唇部押圧状圧痕 横位沈線 口縁内面に横位沈線	II群
32	I B 2e 2層	深鉢	口縁部	口唇部押圧状圧痕 太い横位沈線 口縁部無文	II群
33	I B 2e 2層	深鉢	口縁部	口縁部無文 頸部に横位沈線	II群
34	I B 2e 2層	深鉢	口縁部	口唇部押圧状圧痕 太い平行沈線 口縁部無文	II群
35	I B 2e 2層	深鉢	口縁部	口唇部波状 口縁部無文	II群
36	I B 2d 2層	深鉢	体部	体部地文のみ	II群

第10表 陶器調査表(2)

番号	出土地点	器種	部位	特徴	分類
3 7	I B 2e 2層	深鉢	体部	体部地文のみ	II群
3 8	I B 2d 2層	鉢	底部	体部地文のみ	II群
3 9	I B 2e 2層	深鉢	体部~底部	体部地文のみ	II群
4 0	I B 2e 2層	深鉢	底部	外底面網代痕	II群
4 1	I B 2f 2層	深鉢	体部~底部	体部地文のみ	II群
4 2	I B 5g 2層	深鉢	底部	外底面網代痕	II群
4 3	I B 1e 2層	浅鉢	体部~底部	体部剥き	II群
4 4	I B 2e 2層	鉢	口縁~底部	体部粗い削き 外底面網代痕	II群
4 5	I B 2d 2層	鉢	口縁	口縁部に刺突文	III群
4 6	I B 2f 2層	鉢	口縁	口縁部に細線文	III群
4 7	I B 2c 2層	鉢	頭部	頭部付近に波状沈線文・横位沈線	III群
4 8	I B 2e 2層	鉢	体部	施文後沈線による区画	III群
4 9	I B 2f 2層	鉢	底部	体部地文のみ 外底面磨き	III群
5 0	I B 2e 2層	鉢	底部	体部地文のみ 外底面磨き	III群
5 1	I B 1f 2層	环	体部~底部	内面黒色処理?	IV群
5 2	I B 2f 2層	环	底部	回転糸切り痕	IV群
5 3	表探	銭貨		第13表参照	

第11表 陶器調査表

番号	出土地点	器種	部位	特徴
1	第5号溝跡	鉢?	体部下部	釉薬は施されていない 横位の沈線

第12表 木製品調査表

番号	出土地点	器種	樹種	特徴
2	第5号溝跡	漆器輪		口径 11.5cm 高さ 5.2cm

第13表 金属製品調査表

番号	出土地点	種別	名 称	直径cm	穿孔cm	厚さcm	重さg	特 徴
5 3	表探	銭貨	昭聖元寶	2.4	0.68	0.16	1.63	背面無文 折二銭

VII. まとめ

ここでは、平成12年度・13年度の調査で検出された遺構及び出土した遺物について簡潔に整理し、まとめとする。

1. 遺構

・土坑

平成12年度調査では、1区において2基検出された。規模は開口部径が約134~82cm、深さが31~24cmを測り、埋土は2層からなる。遺物は銅片が1点のみで、土坑の時期や性格を特定するには至らなかった。また、平成13年度調査では土坑は検出されていない。

・溝跡

平成12年度調査では、1区において3条、平成13年度調査では3区において同じく3条の溝跡が検出された。平成12年度調査で検出された溝跡の規模は幅13~125cm、深さ8~17cm、長さ3.2~15.5mを測る。また、どの溝跡からも出土遺物はなく、時期や性格等の詳細は不明である。平成13年度調査で検出された溝跡の規模は幅40~130cm、深さ7~28cm、長さ7~26mを測る。5号溝跡（SD05）より軸索の施されていない陶器片1点と漆器碗1点が出土している。これらの溝跡は環状を掘り込んでいるほか、出土した遺物から判断して近世以降のものと思われる。性格等の詳細については不明である。

・柱穴状小土坑群

平成12年度調査の1区において柱穴状の小土坑が80基検出された。埋土は黒褐色土または暗褐色土の單層に分けられるが、建物路を構成するような配列は確認されなかった。また、出土遺物もなく時期、性格等は不明である。

・旧河道路

平成12年度調査の2区東側において旧河道が確認された。ほぼ南北方向に延びていると思われ、確認された長さは27mである。

・遺物集中区

平成12年度調査、平成13年度調査共に、遺構には伴わないが遺物が集中して出土する範囲が確認された。どちらも旧河道の範囲内もしくは近接すると思われる区域で、縄文時代晚期後葉~弥生時代はじめ墳の土器が中心である。本遺跡の周辺に存在する縄期の遺跡から流れ込んだものと思われる。

2. 遺物

・土器及び石器

平成12年度・13年度とも遺物の大部分を占めるのは縄文時代晚期後葉に属すると思われる土器で、それに次ぐのが弥生時代初頭～前期に属すると思われる土器である。器種は鉢、深鉢の割合が高く、浅鉢、台付鉢がこれに続く。少数ではあるが壺、蓋も見られる。さらに数は少なくなるがロクロ使用痕のある土師器片も出土している。また、平成12年度調査では1号土坑の埋土より剝片が1点出土しているが、それ以外の石器は土器と同様に全て遺構外からの出土である。これらの土器及び石器は大半が遺構外からの出土であり、当時北上川へ流れ込んでいた旧河道によって周辺の歴期の遺跡から運ばれてきた可能性が高い。

（参考・引用文献）

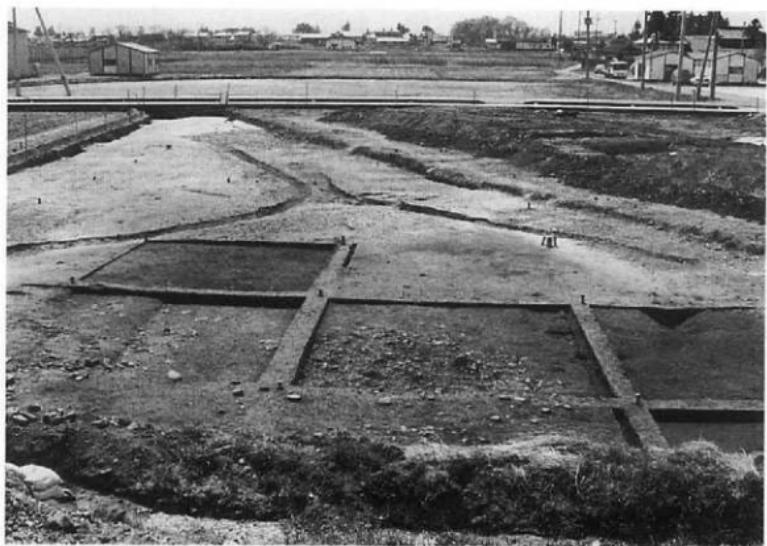
- 朝木沢市埋蔵文化財調査センター（1999）：「杉の堂遺跡」 朝木沢市埋蔵文化財調査センター報告書第13集
朝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1997）：「上鹿生遺跡発掘調査報告書」 岩手埋文報告書第253集
朝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：「川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手埋文報告書第317集
高橋信雄・小田野信彦・熊谷常正（1982）：「磐手の土器」 岩手県立博物館
村越 薫：「亀ヶ岡式土器」 ニュー・サイエンス社
伊藤信雄（1974）「水沢地方の弥生式土器」：水沢市史 I
兵庫県埋蔵文化財調査会（1996）：「日本出土鏡鑑観」

写 真 図 版

(平成13年度)



3区 調査前風景



3区 全景

写真図版10 3区調査前風景・3区全景



3区 基本土層



4号溝跡 平面



4号溝跡 断面 (A-A')



4号溝跡 断面 (B-B')

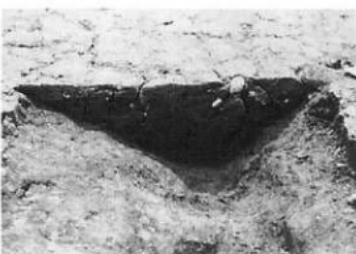
写真図版11 3区基本土層・4号溝跡



5号溝跡南側 平面



5号溝跡 断面 (口-口')



5号溝跡 断面 (C-C')



5号溝跡北側 平面



5号溝跡 断面 (E-E')



5号溝遺物出土状況

写真図版12 5号溝跡



6号溝跡 平面



6号溝跡 断面 (F-F')



6号溝跡 断面 (G-G')



遺物出土状況

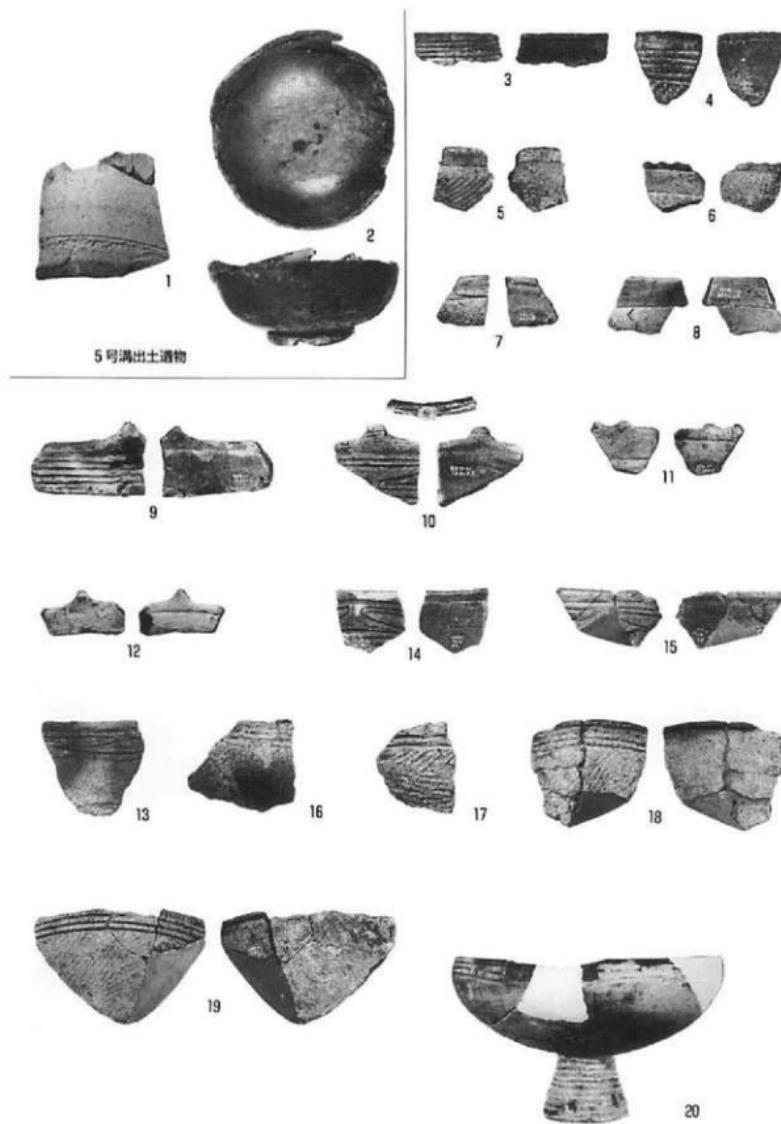


遺物出土状況



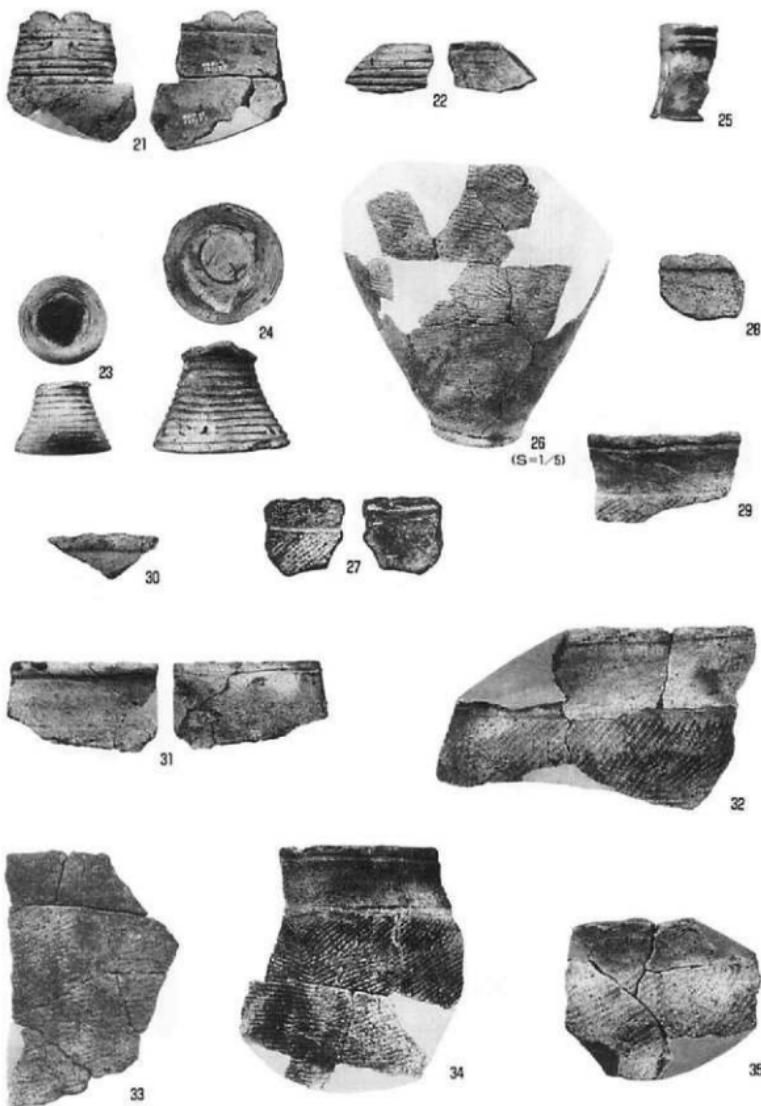
作業風景

写真図版13 6号溝跡



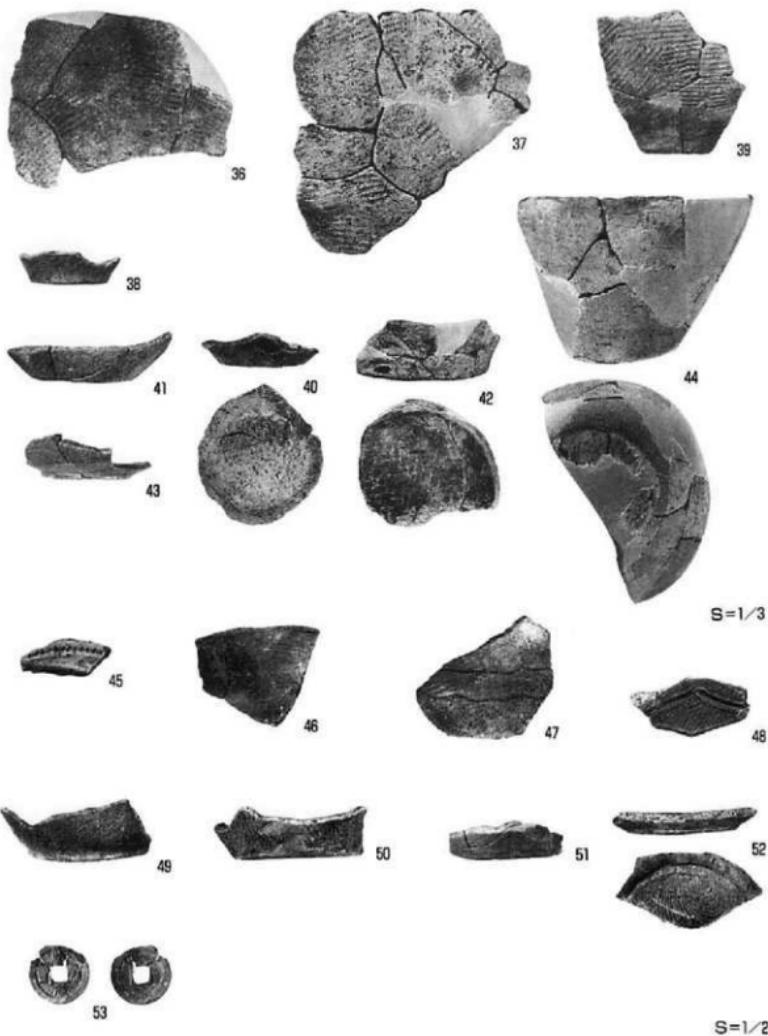
写真図版14 遺構内・遺構外出土遺物 (1)

S=1/3

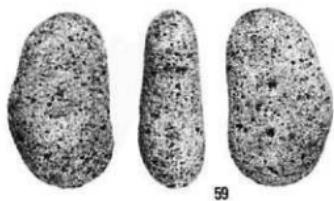


写真図版15 遺構外出土遺物 (2)

$S=1/3$



写真図版16 遺構外出土遺物 (3)



写真図版17 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きただにいせきはっくつちょうさほうごくしょ
書名	北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	水沢東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査
卷次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第395集
編著者名	工藤徹・菅原靖男・齋藤麻紀子
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL 019-638-9001
発行年月日	西暦2002年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北田Ⅱ遺跡	岩手県水沢市 佐倉河字前田 中4-3ほか		NE10-2038	39度 08分 27秒	141度 09分 57秒	2000.8.11 ～ 2000.10.16 2001.4.9 ～ 2001.5.7	2,408m ² 900m ²	水沢東バイ パス建設工 事に伴う緊 急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北田Ⅱ遺跡	散布跡	平成12年度調査 縄文時代晚期 弥生時代初頭 ～前期 平成13年度調査 縄文時代晚期 弥生時代初頭 近世以降？	土坑 溝状遺構 柱穴状土坑 旧河道 溝状遺構	2基 3条 80基 3条	縄文土器(晚期) 弥生土器 石器 錢貨 縄文土器(晚期) 弥生土器 石器 陶器・木製品・錢貨

平成13年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

〔職所〕 日長伊藤民也 岡所長高橋正健

〔督 理 課〕		嘱 托	
課 長 佐	晋光美志		雄童子子
課 長 *	正善直多加		光照美邦
主 沢崎岸花			橋木藤沢
立 蓼山山立			高佐加湯

(調査第一課) 課長 佐々木 勝
課長補佐 佐々木 清文 (調査第二課) 課長 高橋 與右衛門
課長補佐 中川 重紀

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第395集

北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

水沢東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

印 刷 平成14年2月22日

発 行 平成14年2月28日

発 行 聞岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185

電 話 (019)638-9001・9002

F A X (019)638-8563

印 刷 大場印刷工業株式会社

〒020-0062 盛岡市长出町14番31号

電 話 (019)623-3228

©聞岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

